

三多摩壮士はなぜ生まれたのか

～自由民権運動にみる多摩のDNA～

2013年度インターゼミ（社会工学会）

多摩学グループ



多摩学電子新書 vol.17

(多摩学新書)

社会工学研究会 多摩学研究

三多摩壮士はなぜ生まれたのか ～自由民権運動にみる多摩のDNA～

多摩大学経営情報学部

根東 佑磨

古西 政樹

角野 匡子

小山 明信

宮崎 大地

伊藤 捺夢

目 次

はじめに	92
本論の目的	92
第1章 自由民権運動と三多摩壮士	93
第1節 自由民権運動とは	93
第2節 多摩地域と自由民権運動	94
第3節 豪農と自由民権運動	94
第4節 明治初期における武相豪農の組織化と自由民権運動	95
第5節 自由民権運動の広がり、変質と三多摩壮士の台頭	97
第2章 連光寺の豪農・富澤家	100
第1節 連光寺村と富澤家	101
第2節 富澤政恕という人物	102
第3節 在村文化と豪農	102
第4節 天然理心流と豪農	104
第5節 尊皇攘夷の思想	105
第6節 まとめ	107
第3章 五日市の豪農・深沢家	108
第1節 深沢家について	108
第2節 深沢家と地域の自由民権運動について	110
第3節 深沢家の自由民権運動を支えた生糸・絹織物	111
第4節 自由民権思想の摂取を可能にした浜街道	112
第5節 五日市憲法を生み出した多摩地域の経済的特性	113
第6節 まとめ	113
第4章 原町田の豪農～石坂昌孝の組織活動～	115
第1節 三多摩壮士とはどのような人物か	115
第2節 神奈川県下大同団結はどのようにして成し遂げられたのか	118
第3節 暴徒化していった三多摩壮士～大阪事件に関与した彼らの心中～	122
第4節 石坂昌孝から読み取る三多摩壮士のナショナリズム	125
第5章 結論	126
第1節 3人の豪農の相違点について	126

第2節	政治思想面から見た豪農の経路.....	127
第3節	社会経済面から見た豪農の経路.....	129
第4節	自由民権、ナショナリズムの視座～現代に受け継がれる DNA と教訓～	131
補章	メディア史において自由民権運動により受けた影響と変貌.....	132
第1節	補章まえがき.....	132
第2節	新聞・文学から見る自由民権運動 ～文字で伝えるメディア～.....	132
第3節	画報・雑誌から見る自由民権運動～絵で届けるメディア～.....	142
第4節	民謡・童謡・演歌から見る自由民権運動～音で届けるメディア～.....	145
第5節	歌舞伎・民俗芸能 ～身体で伝えるメディア～.....	147
第6節	多摩地域の民権家の蔵書から見るメディアの重要性.....	150
第7節	考察.....	153
参考文献	154

はじめに

本論の目的

多摩地域は自由民権運動が非常に活発な地域であった。明治初期から始まり、三多摩移管を経て多摩地域が東京府に移管された後も、その動きは止まらなかった。自由民権運動の当事者は単なる支援者から運動家まで多様であるが、中でも明治 20 年代からは行動的な政治運動家が多摩地域の名前を冠して「三多摩壮士」と呼ばれるほど、その重要性が注目された。換言すれば、自由民権運動と活動的青年が結びついて影響力を増す程度の多数を占めたのが、他地域とは異なる多摩地域の特徴とも言えるのだろう。

この三多摩壮士の出自を追うと、多くの活動的民権家は豪農層である。とはいえ、小規模土地所有者であり、「没落傾向の豪農層」が多かった。日清戦争による国権論の高揚、その後の議会政治の定着ならびに政党政治の確立、大正デモクラシーの時代を経るに従い、「院外団」といった別称で暴力的なイメージを帯びる壮士であった。時代を経ると、実業家として身を起こした者もいる。しかし、その出発点を見ると、幕末期の豪農層が明治前期に活動を開始している点で共通しているように思われる。

しかも、多摩地域の場合、幕藩期にあつては天領であったため、下級武士と豪農層がきわめて近く、しかも村を治める重要な役割を担っていたという特徴がある。三多摩壮士を問題にすることは、世界と連結した日本経済の変化や、自由民権運動やナショナリズム高揚に対し、多摩の豪農がどのように対していったのかを明らかにすることなのである。

そこで本論では、まず連光寺村の豪農・富澤家の動きを見ることで、三多摩壮士とは一定の距離をもち続け、後に明治天皇との結びつく「身分上昇志向的な豪農」を明らかにする。

続いて、五日市憲法を事例に、下級武士と豪農が結びついた形で私擬憲法を生んだ「名望家志向的な豪農」を描いていく。

この豪農の姿を三類型で描いていく中で、三多摩壮士がどのような活動を展開していったのかを明らかにする。

第三に、多摩の自由民権運動を語る上で欠かすことのできない人物である石坂昌孝を例に、三多摩壮士に力を与えていく「アウトサイダー志向的な豪農」を、民権結社組織論とともに明らかにする。

以上、多摩地域における代表的な豪農 3 人の社会的、経済的背景および自由民権運動への関わりを明らかにすることで、豪農にどのような条件が具備されたときに、自ら三多摩壮士として激しい運動に参画していくことになるのか論じていく。

第1章 自由民権運動と三多摩壮士

第1節 自由民権運動とは

明治初期、藩閥専制政治に反対する土佐藩士の板垣退助（1837年～1919年）、肥前藩士江藤新平らによる「人間は自由で平等である」との基本思想に基づき、国会設立（参政権）・憲法制定・地租の軽減などの要求した政治運動を自由民権運動という。薩長出身者による明治新政府の官僚専制や藩閥政治に対して批判が高まり、国会開設を求める自由民権運動が全国で高まった。

自由民権運動の端緒を開いた人物は、板垣退助である。板垣は、1873（明治6）年の征韓論争に敗れ、政府から去っていたが、1874（明治7）年には、地元の土佐に政治結社、立志社をつくり、当時薩摩藩や長州藩など一部の藩の人間のみが政治を行っていることを批判し、国民が選んだ議員に政治を任せべきだと主張した。これが、「民選議員設立の建白書（意見書）」であり、自由民権運動の始まりとされる。

翌1875（明治8）年には、全国的な組織愛国社を結成。この愛国社は、板垣退助が参議に復活したことや資金の問題でいったん解散となる。しかし、当初、士族が中心であった運動もしだいに地主や商工業者、農民などにも浸透していき、板垣らの呼びかけにより始まった国会開設の請願書には26万人もの署名が集まる。さらに、1880（明治13）年3月に24府県114人の代表が集まり大阪の大融寺で結成された「国会期成同盟」を中心に組織的に取り組まれた。自由民権運動は国会や憲法をつくることで、国民の参政権を保障するよう政府へ要求し、その実現をめざした運動で明治10年代を中心に盛り上がりを見せたのである。

1880（明治13）年4月5日に政府が、警察の許可無く自由民権運動の集会や団体の結成を禁止するばかりか警察が集会を解散させる権限を有する集会条例を制定して弾圧に乗り出す中の同月17日には、「国会ヲ開設スル允可ヲ上願スル書」を政府に提出したことを契機にさらに運動が高まりをみせた。こうしたことを受けて、ようやく1881（明治14）年には明治天皇より国会開設の詔が発せられ10年後に国会を開くことが約束されることとなった。

こうした運動の背景には、福沢諭吉らが紹介した西洋の自由思想が人々の間に広まっていたことがあった。具体的には「人には生まれながらにして自由・平等の権利がある」とする天賦人権思想の影響である。地域リーダーたちは、自由民権運動が描く国家構想や個人の自主性を重んじる考え方に共感し、社会再編のイメージをふくらませていったのである。明治10年代の義務ばかりが先行して権利が十分に与えられていない時代に、納税・徴兵などの義務に見合う政治的な権利を要求したい、という彼らの欲求が、自由民権運動へ参加を促したといえるだろう。

第2節 多摩地域と自由民権運動

多摩地域は、自由民権運動が最も盛んであった地域のひとつであることで知られている。多摩地域がなぜ自由民権運動が盛んであったのかは、3人の豪農の自由民権運動へのかかわりやメディアの役割を述べる中で明らかにしていくが、その発端は櫻鳴社という結社に由来するとされる。横浜の第4櫻鳴社設立に影響を受けた八王子では1880(明治13)年第15櫻鳴社を誕生させる。このことによって三多摩一帯の民権運動は大きく刺激された。後述する「五日市憲法」を生み出した、西多摩郡五日市でも、八王子第15櫻鳴社に刺激されて同年2月ごろから活発な動きをみせ始めた。

多摩地域は、自由民権運動が盛んだった時期、神奈川県に属していた。神奈川県は、武蔵国(武州)6郡と相模国(相州)9郡から成り立っていたために、「武相」とも呼ばれていた。そして当初、武蔵と相模に分かれて活動していた運動を、1つにまとめようとしたのが町田市域の民権家であった。彼らは、1881(明治14)年に原町田で武相懇親会を開き、その後も武相の自由民権運動をリードしていくことになる。地理的にも武相と相模の境界に位置した町田が、武相の運動を1つにまとめ上げ、自由党の牙城と呼ばれるまでに成長させる役割を果たしたのである。

幕末から明治初年の急激な変化は、政治だけではなく、経済や文化、生活習慣にいたるまで、地域社会にさまざまな動揺と混乱をもたらしたのである。幕末から村役人など村の要職を担った豪農商たちは、欧米からの文物にも関心を持ち、それを採り入れつつ、地域リーダーとして秩序の回復・再建に取り組んだ。その選択肢の1つが自由民権運動であった。彼らが自由民権運動に参加したのは、幕末以来の国家的危機と激動のなかで地域秩序の再建に奔走しつつ、政治的な自覚を養ってきたためでもある。

第3節 豪農と自由民権運動

豪農の明確な定義はないが、伝田(1978)によると、「幕末期から明治期にかけて、土地所有者であるとともに、いわゆる地主手作経営に従事し、場合によっては農村小工業の経営者として活躍した社会層を意味する。彼等は江戸時代においては大庄屋や村役人層を構成し、維新後においては区戸長、府県会議員、国会議員などとして、地方行政や政治面にも進出し、さらに地方産業、地方文化の育成にも重要な係わり合いも有してきた人々であった」とされる。¹

豪農層は、経済的基盤と社会的地位のゆえに、いわゆる知識人としての性格を有する人々を生み出した。名望家の人々は江戸中期頃より次第に読書、好学が広まり、地方在住の豪農に浸透していった。これは豪農層の人間が生活上に余裕があり時間が余っていたためであると考えられるが多摩という天領地にあっては、名主の実質的支配が大きく身分上昇願望も強かったのではないかと推測される。武家のたしなみとしての学問が豪農層に普及し、それが身分制の崩壊した明治期でどの様な役割を果たしたかは興味深い点である。

¹伝田功『豪農』教育社、1978年8月。

明治維新後、政府が発足し、様々な近代化政策が打ち出された。しかしながら、これら政策は、ある一面では豪農層の利害を損なうことが多かった。その代表的なのが地租軽減と紡績業・製糸業が国営になったことである。とくに生糸関係で稼いでいた豪農たちにとって非常に大きな痛手になり、没落してしまうようなものもいたのである。その怒りが自由民権運動へと発展させたのではないかと推測するのは容易であろう。

自由民権運動では天武人権論を背景に、国会開設、地租軽減、不平等条約の撤廃を掲げ多くの国民が動いた。

農村では自由民権運動に関心を寄せる人が多く、運動に挺身した人々は、幕末期以来地域社会での多面にわたるリーダーとしての地位を占めていた豪農層であった。彼等は地主として農業生産に関わりを持つと同時に製糸業、織物業などのマニファクチャア段階に発展した地方工業に関連を持つ層でもあった。豪農層の多くは長年にわたり名主をつとめ、あるいは区戸長を務めるなどの経歴を持ち、地方民生について豊富な経験と抱負を持つ人が多かった。伝田（1978）には以下のような記述がある。「彼らの背景には一般農民層とともに築きあげ、維持してきた郷土が存在した。かような社会層であるがゆえに、地租の負担や勸業費の動向に大きな関心を寄せるとともに、民生の安定のために顧慮するところが大きかった。そしてかような地方人民の日常生活に至大の関係をもつ問題について、彼等の主張を反映する場として、地方国会や国会の開設が欲求されることとなったのである。」²つまり彼らは自分たちのため、そしてその地域に住む農民を苦から助け出すため立ち上がってきたのであった。

第4節 明治初期における武相豪農の組織化と自由民権運動

自由民権運動は、単なる政治的運動にとどまらない幅広い運動に発展していったところにその大きな特徴を見ることができる。それは、明治専制政府の変革を求めて、全国各地の農山村に生まれた結社が、学習を中心とした一大文化運動、思想運動までに展開していったことである。運動の初期に重要な役割を担った愛国社は一時解散されたが、1878（明治11）年9月、土佐立志社の呼び掛けによって大阪に再興された。そして翌1879（明治12）年11月の第3回愛国社大会には、はじめて福井県、福島県、茨城県、山梨県などの豪農政社の代表が参加してきたのである。すなわち、旧士族出身の民権家中心勢力による民撰議院設立建白の運動は、地租改正反対などを主題として反政府的活動を展開してきた豪農層を主体とする農民層を巻き込んでいった。これによって自由民権運動は一段と深化していくのである。ここでは、こうした豪農層の役割を踏まえ、多摩地域における豪農の組織化と自由民権運動をみていくことにする。

1853（嘉永6）年の黒船来航は、幕府や大名（武士）だけでなく、武相地域に住む人びとも大きな衝撃を与えていた。以後、外国人の排斥・天皇中心の政治をめざす尊王攘夷運動の高まりにより、政治は混乱し、社会不安を招いた。そうしたなか、人びとは砲台建

² 伝田前掲書（1978）

設や沿岸警備への動員など、さまざまな負担を課せられていたのである。

一方で、開国は豪農層に経済的な利益をもたらす契機にもなった。1858（安政 5）年に日米修好通商条約が結ばれ、欧米諸国との貿易が活発になると、養蚕業が盛んだった武相地域からは、生糸が大量に輸出され、それを扱う商人や豪農たちは大きな利益を得たのである。こうした貿易に携わる中で、豪農たちは、経営者として、また地域のリーダーとして、社会情勢にすばやく対応するため、積極的にさまざまな情報を収集し、欧米諸国の自由民権思想も摂取していったのである。

こうした思想を礎としながら、1877（明治 10）年から、武相各地で結社がつくられ、活動を始めた。それは、幕末から明治初年の急激な社会の変化や地域の混乱に向きあい、欧米諸国の文物を採り入れながら、新たな社会をつくり出そうとする模索でもあったのだ。なかでも、欧米諸国の制度や思想、とりわけ立憲制度やその基になっている天賦人権思想に関心をもつ結社が多く生まれてきたと考えられる。

結社の多くは、社員が相談しながらつくった規則で、主義や目的、その実現に向けた活動方法、社員のあるべき姿などを定めている。活動方法では、多くの結社が定期的な演説・討論会の開催を採り入れている。社員が、自分の考えを整理して議論することで、知識を増やし、思想を高めようとしたのである。武相の自由民権運動は、こうした結社の活動からはじまったのである。

1879（明治 12）年、各府県に地方議会が設けられた。神奈川県にも県会が開設され、初代の議長には後述する石坂昌孝が就いている。

県会は、選挙によって各郡から選ばれた県会議員が県政に関する議論をかさねる場である。この選挙に議会は、さまざまな制約をともなつてはいたものの、従来望むべくもなかった地域リーダーの政治参加を可能にし、新たな経験をもたらした。また県会議員となった武相各地の地域リーダーが、県会で自らの考えを表明し、議論によって政治意識を高めたことは、彼ら自身の政治的成長や、県会でのつながりを活かした県域規模のネットワークづくりを促した。こうした経験が、以降、県会議員経験者を中心に展開される武相の自由民権運動の礎となったのである。

自由民権運動の第一の目的は、政府に対して「立憲政体」の実現を要求することである。立憲政体とは選挙で選ばれた代表者による国会で国の政治方針を決定する権限を、憲法が国民に保障している体制のことである。つまり、自由民権運動は国の政治に関心を持ち、その決定に参加したいと考えた人びとによる、国民の参加権を要求することを主眼においた運動といえる。

1880（明治 13）年には、全国的に国会開設運動とそれにともなう憲法起草運動が盛り上がったのだ。武相地域でも、相州の 2 万余人が署名して国会開設の建白書を、北多摩郡本集村（現府中市）出身の松村弁治朗も個人で建白書を提出している。五日市では、千葉卓三郎³により、深沢家の章で詳述する、205 条にも及ぶ憲法草案「日本帝国憲法」（＝通称

³ 千葉卓三郎（1852～1883）宮城県出身。上京した後、五日市の勸学校に勤める。深沢権

「五日市憲法」が編まれた。

国会開設運動の盛り上がりは、全国の有志が参加した1880（明治13）年の国会期成同盟の結成、武相地域から国会期成同盟への積極的な参加は確認できないが、自由党への入党者数は全国的にみても多く、自由党の牙城の1つともなったのである。また、石坂昌孝や吉野泰三のように、幹部として党中央の活動に関与する者もいたと考える。

だが、1882（明治15）年の集会条例改定で地方支部が禁止されると、地方の組織化や連携に苦しみながら活動せざるをえなくなった。地域的な課題を意識した結社の活動からはじまった武相の自由民権運動は、これを機に、党の方針に基づく全国的に統一されたものへと変わっていった。

第5節 自由民権運動の広がり、変質と三多摩壮士の台頭

自由民権運動の特徴に、演説会や討論会を熱心に開いたことがあげられる。演説や討論は、もともと欧米の文化で、明治になって日本に採り入れられたものである。特に、大勢に自らの考えを伝える演説は、民権運動に不可欠な活動手段となるのだ。1880（明治13）年ごろから、武相各地でも演説会が開かれていた。これに対し、政府は集会条例を定める。これにより、臨席する警察官が演説会の中止解散を命じたり、弁士を検挙したりするなど、たびたび言論弾圧が加えられた。しかし、警察官を前にした政府批判演説により、かえって会場は緊張と興奮に包まれ、さらなる盛り上がりを見せていたのである。

このように、自由民権運動は、新聞・雑誌などのメディアが運動と絡みあいながら生まれたのだ。こうした自由民権運動におけるメディアの役割は、章を立てて後述したい。武相地域でも、「横浜毎日新聞」「武蔵野叢誌」などが創刊され、新聞・雑誌が発信する情報に触れた人びとは、同じ「読者」として、情報や価値観を共有することとなる。新聞・雑誌などのメディアは、集団意思統一を図ったり、集団の意思を外部に対して表明したりするうえで効果的だったことから、言論を武器とする自由民権運動の有効な道具としても、積極的に活用していたと考えられる。

国会開設が近づくと、自由民権派の動きはふたたび活発化した。党派を超えた団結を呼びかける大同団結運動や、「地租軽減」「言論・集会の自由」「外交失策の挽回」を掲げる3大事件建白書が大々的に展開されたのである。

多摩地域においても、「民撰議員設立建白書の提出によって幕をあけた自由民権運動は学習ブームを迎え、壮士達は近代民主主義の核心をなす、「自由」「人権」「立憲政体」などの文字にはじめて接し、人民の自覚と成長を阻んできた封建的観念が目からウロコの落ちるような思いで消えていくのを感じていった」のであろう。⁴

その後、自由民権運動は、経済の激変で過激な方向に変質してゆく。自由民権運動は、

八らと共に五日市学芸講談会を結成する。

⁴大畑哲『神奈川の自由民権運動』新神奈川社 1981年、33頁。

生活苦にあえいだ農民らの起した福島事件や秩父事件によって、政府の取り締まりが強化され、一時の勢いを失っていくことになる。言論の力で政府を動かそうと試みた板垣退助らの運動は、この頃になると言論運動のみならず、高利貸しや役所を襲うといった実力行使にでる人々も台頭する。

前述のとおり、1874（明治 7）年、板垣退助は政府が薩摩、長州など一部の藩の出身者に限られていることを「有司」の専制だと批判し、人民の声を政治に反映するため民撰議員設立建白書を提出したのであったが、これが全国民の共鳴するところとなって、たちまち多数の同士を得、1881（明治 14）年に自由党を創立した。そしてこの年に明治天皇は国会を 1890（明治 23）年に開くとの詔勅を下し自由民権運動の沈静化をはかったのであったが、抑止することができぬばかりか、むしろ火に油を注ぐ結果となり、全国憂国の青年は東奔西走して、同士に糾合につとめ、各地に集会や演説会が開かれ、物情騒然として、政府もその対策にほとんど手を焼く始末であった。

自由党解党後、武相地域の旧自由党系の運動家たちは、これを機に情報発信機能を充実させた神奈川県通信所を設ける。さらに、1889（明治 22）年 2 月に憲法が公布されると、中央での大同団結運動に混乱・亀裂が生じるなか、総選挙にむけた組織基盤強化のため、神奈川県倶楽部を結成したのである。

一方、実力行使をともなって台頭した、「壮士」の運動に批判的な面々が北多摩郡正義派を結成するなど、神奈川県倶楽部から離脱する動きも起こってきた。

三多摩壮士と呼ばれた人々は、確かに明治中ごろから大正にかけて院外団として活躍、選挙運動のときなどは仕込み杖を振るい実力行動を繰り返していた。そうした人々の中には、自由民権運動の担い手として明確な主義と深い思想性を失し、ただ暴力的行動を繰り返すものも現れたのである。

佐藤（1973）には、壮士についてこう記述がある。「この頃この運動に参加した青年たちを「有志家」とか「壮士」とか呼んでいた。しかし、尾崎罌堂の語るところによると「壮士」というのは、1887（明治 20）年、旧自由、改進黨の両党が、大同団結し、東京政府に国辱的条約改正反対運動を行ったところ、全国 3,000 の青年行動隊が、あるいは羽織はかまで、またわらじばきで宮城前広場に参集した。彼らを「壮士」といって大いに激励したことから始まるといわれている。」⁵

壮士とは、前漢の劉向の撰になり、戦国時代の遊説の士の言説、国策、献策、その他の逸話を国別にまとめた『戦国策』（せんごくさく）の「風肅々として易水寒し、壮士一たび去りて復た還らず」に由来し、決死の覚悟で敵地に赴く刺客のことである。自由民権運動の周辺に登場する青年活動家は、こうした熱気と殺気を併せもった存在であったことを示している言葉である。明治維新による国民的エネルギーの解放は、この時期に主としてほかに職業をもたない青年層の動きとして現れ、維新前後に誕生し、明治初年に成長した新しい世代のうちから、自由民権と国民的独立の意識に目覚めた青年の自発的運動が発生し

⁵ 佐藤孝太郎『三多摩の壮士』武蔵書房、1973年、3頁。

てくることになる。

こうした壮士の存在感は、特に三多摩地域で活発となり、政治との結びつきを強めていく。1889（明治22）年2月11日、大日本帝国憲法が公布され、その翌1890（明治23）年、第一回衆議院議員選挙が実施されると、三多摩壮士は、石坂昌孝、瀬戸岡為一郎を応援し、圧倒的な勝利を得た。これは、自由民権運動以来、彼らが各農村に、しっかりと根を下ろしていた結果の勝利であると考えられている。

1889年（明治22）6月、大同団結組織として神奈川県倶楽部が設立、旧自由党員の多くが参加していた。三多摩壮士はこうした組織の中核となっており、中でも最も急進的な集団として注目されていた。

壮士の役割は、選挙が始まると、有権者の獲得から始まり、他党の手から有権者を守るため、斬り合いを演じたり、また、議員の護衛をするなどであったため、議会開設とともに壮士の株は日増しに上がっていった。そのため壮士の議員に対する発言権も強力なものとなり、院外団としての組織を結成し、院内での代議士の行動を厳しく監督する圧力団体となっていたのである。

図表 1-1 自由民権運動の概略史

年	政府運動	民権運動	民衆運動
1872～1875	大阪会議 廃刀令公布	民選議員設立の建白書 提出	茨城県、東海地方で地租改正反対の一大一揆
1876～1878			茨城県、東海地方で地租改正反対の一大一揆
1879～1882	国会開設の勅諭(明治 14年の政変)	国会期成同盟 政党結成	
1883～1885	内閣制度確立	政党の結成と解党	激化事件が活発
1886～1888	第一回帝国議会	高知県代表「三大事件 建白運動」元老院に提出	
1889～1892	大日本帝国憲法公布 衆議院選挙 第2回帝国議会		

（資料）安在邦男『自由民権運動への招待』吉田書店、2012年、および岩波書店『日本史年表 第4版』2001年より作成

第2章 連光寺の豪農・富澤家

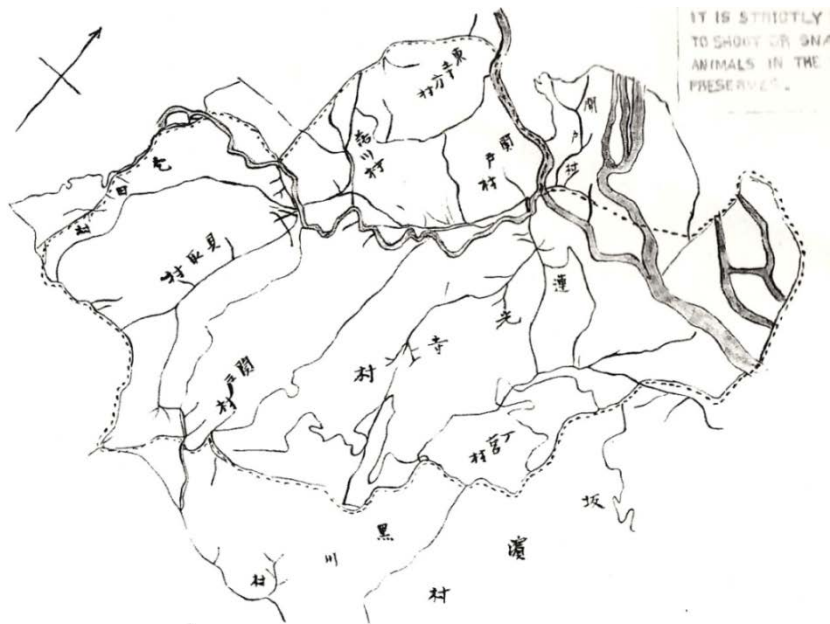
この章では、三多摩の代表的豪農の一人である連光寺の「富澤政恕」について述べる。彼は三多摩壮士とは一定の距離をもち続け、後に明治天皇と結びつく「身分上昇志向的な豪農」の代表格というべき者である。しかし、自ら三多摩壮士の活動には深入りしていかないものの、三多摩壮士に大きな役割を果たしている可能性があり、「富澤政恕」を研究することで、豪農が三多摩壮士の活動に深く関わっていく、または深く関わっていかないという、その分かれ目になる条件を探ることができると考えたのである。また、富澤を調べることで江戸後期から明治の激動の中で起こった在村文化や天然理心流と三多摩壮士への影響を解明する。

図表 2-1 富澤政恕関連年表

西暦	年号	主な出来事
1824	文政7	武蔵国日野領連光寺村に生まれる 父昌徳、母まき
1835	天保6	政恕 12歳このころから俳諧を嗜む
1838	天保9	政恕 天然理心流入門近藤周助から学ぶ 内藤重喬より漢学、春亮上人より茶道、押花を学ぶ
1840	天保11	政恕 小野胡山に詩文、前田夏陰より和歌、 佐藤一斎より儒学を学ぶ
1859	安政6	土方歳三天然理心流入門
1860	万延元	名主に選任
1861	文久元	政恕、日野宿44ヶ村の大惣代に選任 近藤勇 第4代天然理心流宗家を襲名
1864	文久4	政恕「旅硯九重日記」を書き始め、同年書き終える 旗本天野雅次郎に随行し上洛 新撰組メンバーと談笑
1868	明治元	明治維新
1879	明治12	第一回神奈川県議会選挙当選
1895	明治32	このころ政恕、「旅硯九重日記」の浄書をする
1907	明治40	死去

(資料) 多摩市教育委員会生涯学習振興課文化財係『新撰組の人々と旧富澤家』財団法人多摩市文化振興財団学芸課、2003年より作成

図表 2-2 連光寺の地図



(資料) 多摩市教育委員会『連光寺の「聖蹟」化と多摩聖蹟記念館』2013年、6頁。

第1節 連光寺村と富澤家

富澤家の始まりは鎌倉時代にさかのぼる。当時畠山重忠の13代後為政が初めて富澤の姓を唱えたのが富澤家の始まりだ。その後為政の孫、政之が今川家に属し、次代のときに今川義元が桶狭間の戦死したため、逃れて連光寺に土着したことが考えられる。

今から400年以上前の1598年(慶長3)徳川家康によって連光寺村の検地⁶が行なわれた際、富澤家の忠岐は村の代表として、案内人を勤めた。

江戸時代の連光寺村は、初期は江戸幕府の直轄地で、代官支配地でしたが、1633年(寛永10年)以降旗本天野家の知行地へと変わった。当時天野家は、5ヵ村で約800石の知行を持っていた。知行所の中では、坂浜村(現稲城市)につぐ約300石高の多い村であった。

富澤家は江戸初期から名主制度の廃止になる1872年(明治5年)まで多年にわたり名主を務めてきた。

名主とは、1年あるいは1月毎に交替で勤める「年番交代」「月番交代」や「定役」といった幕藩体制下の役職は交代制で行なわれた。稀に1代、2代限りで交替するものもあったとされる。しかし、幕末の頃になると名主の決め方にも変化が見られた。入札制度が導入され、村民が決めるようになっていった。また、当時の村の自治体は、名主、組頭、百姓代があり、彼らは村方三役と呼ばれ、三職が一体となって村の統治を委任されたと解釈で

⁶ 年貢の取立てるための、田・畑・屋敷などの測定調査のこと

きる。したがって特に天領にあつては、村民の厚い信頼がない豪農は名主にはなれなかった。このことは富澤家においても同様であったと思われる。後の 1879 年（明治 12 年）の神奈川県議会選挙で富澤政恕は当選した。当時の選挙権は二十五歳以上で十五円以上の直接、納税した者にのみ与えられる制限選挙で明治二十二年での神奈川県の選挙人数は六九八名であつてここで当選した豪農層は裕福であり、村民に近い立場に立ちながらも、社会的地位の上昇を見込める中間的な位置を占めていたと言つて良いだろう。

また名主家が文化人を生んだ背景に実学・教養として学問・文化が必要であつた。またその活動を行なうには経済的余裕が必要であつた。しかし、すべての富裕層の人が文化人であつたわけではない。個別に見ると、そこには名主になる覚悟、自覚が必要であつたであろうことは想像に難しくない。

明治時代になると、地方議会が開かれるようになった。15 代政恕は、1879 年（明治 12 年）、第 1 回神奈川県議会から 2 回連続で議員に選出された。その後、1881 年（明治 14 年）に議員の職を辞退し、その後天皇家との関わりを強くしていた。

第 2 節 富澤政恕という人物

政恕は 15 代当主で 1824 年（文政 7）に連光寺村に生まれ、若いときから連光寺村名主を務めた。1861 年（文久元）のときに日野宿寄場組合 44 ヶ村の大惣代に任命されるなどリーダー気質を持ち合わせていることがわかる。

更に彼は 10 代の頃～剣術を学び、天然理心流三代目近藤周助の門人であり、近藤勇の四代目襲名披露の野試合に大きな役割を果たしている。

そして、政恕は、新田を開発し、戸籍を編集し、連光寺に学校を設立するなど地域活性化に大きく貢献もしている。

清水（2012）によると、このような記述がある。「文化面では名主として俳諧、和歌、漢詩、さらに茶道、押花などを嗜みました。特に俳諧においては、多摩村のみならず、日野、町田方面にも門人がいるほどの近隣の中心的存在であり、門弟指導にあつた功績は大きなもの。」このことから、幅広い知識と優れた武力（剣術）を持った人望ある人物であつたといえるだろう。

第 3 節 在村文化と豪農

第 1 項 在村文化

在村文化とは、村々で行われた、俳諧・狂歌・和歌・漢詩・書画・花道などの文化活動のことである。

幕末期の政恕は、文化人として様々なことを行つていた。彼の自校本「日野組八天狗伝」によると以下の通りである。

「日野宿組合の惣代など当時の地域の代表的な人物を天狗に例え、得意とするところを『通力』としたもので、文久元年（一八六一）末の作成と思われる。柴崎村名主鈴木平九

朗は『天性関連にして言語政事』、日野宿の佐藤彦五郎は『天性敏○にして剣術と俳諧をもつて通力を得』、栗須村名主井上忠左衛門は『天性○発にして弁才であり』、関戸名主の井上惣兵衛は『天性剛気にして常に酒を好ミ』、川辺堀之内名主の追沼捨五郎は『天性順和にして常に虚実の間に住』、郷地村名主紅林兵蔵は『天性自若物に拘らず専ら酒をこのむ』、落合村名主の寺沢旧兵衛は『天性弁才あり』・『酒を嫌らひ茶を好む』とある。序は平喜庵一步（鈴木平九朗）と春日庵盛車（佐藤彦五郎）による。砕けた内容であるから、宴席などで披露されたのであろう。これら当時の日野宿組合を代表する顔ぶれの中で、大惣代を務めたのが政恕であった。」⁷

つまり、政恕にはこのすべての人物を纏めるカリスマ性が窺えるであろう。

また「八仙伝」によると周囲の代表的な文化人と得意とする文化や性格を記し、紹介している。この中には図表 2-1 で記した人物なども記述されている。その詳細を図表 2-3 に示した。

図表 2-3 富澤政恕と周囲の文化人没年一覧

人物名	生まれ年	没年
内藤重喬	1762 (宝暦 12)	1843 (天保 18)
相澤伴主	1768 (明和 5)	1849 (嘉永 2)
春登上人	1773 (安永 2)	1836 (天保 8)
富澤昌徳 (魯平)	1778 (安永 7)	1857 (安政 4)
猿渡盛章	1788 (天明 8)	1865 (慶応 1)
宝雪庵可尊	1790 (寛政 2)	1863 (文久 3)
猿渡容盛	1799 (寛政 11)	1886 (明治 19)
本田覚庵	1814 (文化 11)	1865 (慶応 1)
富澤政恕	1824 (文政 7)	1908 (明治 41)

(資料) 松尾正人『多摩の近世・近代史』中央大学出版部 2012 年、51 頁。

8人と富澤政恕でこのうち3名が親類であるから残りの5人は政恕が特に支持していた人物であったことが推測される。また彼らは、府中・関戸・連光寺の人間で政恕は文化活動では公的な枠組みの日野宿組合とは別の交流圏にも属していた。

内藤儒僑は富澤政恕の父昌徳（魯平）の伯父で、府中本宿村で医者を務めていた。政恕は幼い頃～父とこの伯父と共に生活する中で、漢学、国学を学んだのである。このことから政恕は恵まれた環境に生まれ、父から多くの文化人人脈を受け継いだといえるだろう。

⁷松尾正人『多摩の近世・近代史』中央大学出版部、2012 年。

第2項 グループで行なわれていた句合

寛政期になると連光寺村で句合が行なわれていたという記述があり、毎月15日前後に行われていたらしい。政恕は父や伯父の開く俳壇に参加し経験を積み、中心人物へと成長していったのである。政恕は府中、和田、関戸などの句合にも参加しており、近隣で実力者として知られていた。

そもそも句合を開くには周辺に人を募るネットワークの存在と、地元でも俳諧の普及が前提に必要であり、連光寺村ではそれを行なうことが可能であった。松尾（2012）には、以下のような記述をみることができる。「連光寺村では天保・弘化年間（一八三〇～四八）には、三五名の俳人が確認されている。天保一四年（一八四三）の家数は八二軒、人口四六〇名であるから名主・村役人とどまらず、広く俳諧が普及していた。」⁸松尾 2012

村内に俳諧が普及してくると同時期に政恕の書いた作品が登場し始める。そもそも、政恕は、前述のとおり、幼い頃から漢詩や和歌を学んでいた。この頃から日記が登場し始めたのは、周辺との交流が活発であったことが伺える。

その後幕末期には通常の日記に加え、旗本天野氏に従い上京した際の様子を『旅硯九重日記』を残している、在京中の旧友の近藤勇や土方歳三と酒を酌み交わしたことなどが記されているなど、道中の様子を和歌や漢詩にするなど着実に力を上げていることがわかる。

一方俳諧のほうは安政期くらいから連歌⁹が増えてきた。連歌は規定があるなど、通常、俳句より難易度が高い。政恕の連歌の技術は高く評価されている。

このように周辺の文芸活動を主導してきた人たちに支持されながら育ち、発想力や考察力を身につけていったのだと考えられる。

第4節 天然理心流と豪農

天然理心流とは、流祖近藤内蔵之助が古武道としては比較的新しい寛政年間に創始した、剣術、居合術、柔術、棍法(棒術)、活法、気合術等を含む総合武術である。また、幕末期には天然理心流 四代目宗家の近藤勇と、門弟の土方歳三、沖田総司、井上源三郎らが、京都において「新撰組」を結成したことでも知られている。

近藤内蔵之助の道場は江戸にあったが、1年の半分以上は、相州・武州多摩郡の門人に剣術を教える出稽古が多かった。その出稽古で、各村の豪農層に教え流派を広めていった。すると、後の代になると、それらの土地から天然理心流を受け継ぐものが現れ、師範代になるような人物も登場した。そこから、流派の細分化されるようになっていたのである。また天然理心流の特徴は以下のものであった。

「あまり小技を用いらないで、気力、気組みで敵を押していく剣法である。重く、太いにぎりの木刀をふるう実践的剣法であった。」⁹

以上のことから天然理心流は非常に素朴な剣法であったといえるだろう。

⁸松尾正人前掲書

⁹小島昌孝『武術・天然理心流 上 新撰組の源流を訪ねて』小島資料館、1978年。

また多摩地域でこのような広がりを見せたのは、この地において、別の剣術の流派が浸透してなかったことが大きな要因ではないだろうか。そこに多摩地域で天然理心流が広まった一つの要因ではないだろうか。更にこの多摩地域には千人同心¹⁰と呼ばれる、いわゆる半農半士できな位置づけの人物も多いため、より実践的な流派が好まれたのではないかと推測できる。

そもそも、多摩地域ではふだんは鋤や鍬を振るい農業に従事し、いざというときは刀に持ち替える武士団が古くから存在した。上記で述べたとおり、実践重視の豪放な剣術である天然理心流は、寛政年間(1789年～1810年)にこの多摩地域に伝わった。二代目三助(近藤三助方昌)のときに八王子の在郷武士団である千人同心に広まっていた。三代目・周助(近藤周助邦武)は、小山村(町田市)の豪農に生まれた。しかし三助の道場は多摩丘陵を越えた戸吹村(八王子市)に通うのは容易ではなかったが、幸い小山村周辺に、三助の弟子たちが多かったため、三助のほうから出稽古にやってくることも多かった。周助はめきめきと上達して、自ら教えるほどの腕前になった。その後周助の自宅のある小山村の自宅に道場を開いた。彼は、近隣の豪農たちに受け入れられ、多くの門人を獲得した。その一人が政恕であった。彼は、表①の通り幼少時代から剣術を学んでいた。

第5節 尊皇攘夷の思想

明治維新が生まれた背景には、尊皇攘夷の考えがあった。尊皇とは、「日本固有の文化を確保し発展させていくこと」

であり、けっして天皇一家を尊重する考えではないのである。攘夷とは「その根本に立つての積極独立ということです。」

日本固有の文化を破壊しようとする勢力を破壊することであってけっして開国に対立する概念ではないのである。

そもそも、この考えは中国周の時代に生まれ、日本では弘化・天保期に研究されていた。この考えは幕末になって広く広まり世間では1つの風潮となった。これは豪農たちの間でも広まり、後の自由民権運動への影響が大きいと考えられる。

政恕は、和歌や国学という日本固有の文化に精通しており、それらを守るという考えがあったのではないかと推測される。自由民権運動で富澤が離脱していくのもこの尊皇攘夷が関わっているのではないかと考えられる。

その後明治に入り、神仏分離により天皇の神格化がおき、天皇の位置づけが格段に上がった。これにより天皇の近くにいる人間(華族)は必然的に位が高くなることは容易に想像できるであろう。

¹⁰千人同心は幕府直属の1,000人の足軽のことである。同心とは下級武士を示す言葉である。発足は1590(天正18年)年に徳川家康が関東入国の際甲斐の国武田軍の家臣の9人を中核とした最初250人の同心で始まり、最終的には一組100人ずつ10組計1,000人へと拡張し千人頭を中心に動いた。仕事内容は主に甲斐の国との国境警備や治安維持を目的とされていた。

図表 2-4 御猟場を訪れた皇族

西暦	元号	月日	狩猟者	狩猟内容
1881年	明治14	2月20日	明治天皇 東伏見宮嘉彰親王 北白川宮能久親王	兎狩
		6月2日	明治天皇 北白川宮能久親王 伏見宮貞愛親王 東伏見宮嘉彰親王	鮎猟
1882年	明治15	2月15 - 16日	明治天皇 北白川宮能久親王 伏見宮貞愛親王 東伏見宮嘉彰親王	兎狩
1884年	明治17	3月29 - 30日	明治天皇 北白川宮能久親王 伏見宮貞愛親王 有栖川宮威仁親王 東伏見宮嘉彰親王	兎狩
1885年	明治18	9月22日	昭憲皇后	鮎猟
1887年	明治19	8月21日	嘉仁親王 (後の大正天皇)	鮎猟
		10月3日	英照皇太后	鮎猟
		10月17日	嘉仁親王	栗の実
1888年	明治21	10月17日	嘉仁親王	地理見学
1892年	明治25	7月1日	嘉仁親王	鮎猟
1893年	明治26	10月8日	嘉仁親王	鮎猟
1900年	明治33	10月7日	嘉仁親王	鳥猟
1907年	明治40	8月2日	嘉仁親王	鮎猟
1908年	明治41	6月7日	嘉仁親王	鮎猟
1909年	明治42	7月18日	嘉仁親王	鮎猟
1910年	明治43	7月18日	聡子内親王	鮎猟
1913年	大正2	8月7日	裕仁親王	鮎猟

(資料) 多摩市教育委員会生涯学習振興課文化財係『新撰組の人々と旧富澤家』2003年より作成

1881(明治14)年以来、明治天皇を始め、皇族たちによる行幸、行啓があり、連光寺にある富澤家は「御小休所」として利用していたのである。

1881(明治14)年2月20日には、明治天皇が急遽兎狩りに行幸した。行き帰りともに富澤家で御小休があり、府中行在所の柏屋へ乗馬で帰っていった。翌1882年(明治15)3月15日、16日の両日には、府中行在所から乗馬で行幸し朝夕二回都合四回の御小休があった。

天皇だけでなく、皇族たちも何度か訪れている。1885(明治18)年には昭憲皇后(明治天皇皇后)、1887(明治20)年には英照皇太后(孝明天皇女御)がそれぞれ鮎漁に幸啓し

ている。嘉仁親王（後の大正天皇）も、皇太子時代に、鮎漁や鳥獵などにも数回訪れている。¹¹

このように明治天皇や多くの皇族は連光寺にある富澤家を訪れ行幸や行啓の御小休所に使われていたのには、いい場所にあったというのがあるかもしれないが、何かの関係があるから御小休所として富澤家が使われていたのだと考える。

では富澤家はなぜここまで明治天皇の関わりがあったのだろうか。密接な関係はないのかもしれないが、富澤家は 1560（永禄 3）年に今川義元が桶狭間の戦で亡ぼされた後、逃れて連光寺に土着した。その後、富澤家の政本の子忠岐が初代名主を務めてから以後、代々連光寺では名主として有名だったことから明治天皇は富澤家を行幸・行啓に利用したのだと考えられる。もうひとつ考えられることは富澤家の住宅が行幸・行啓に最適の部屋があるからと考えられる。その後明治天皇が亡くなり、聖蹟記念館を建造するとなったときに、宮内大臣の田中光顕（1843～1939）と富澤家で協力して建造された。

第 6 節 まとめ

このように、富澤政恕は幼い頃から、幅広い教養を学んだ。父や伯父等から学んだ、漢詩や茶道、近藤周助から習った天然理心流、これらに眠る思想的影響を受けている。また、父や伯父とともに句合に積極的に参加し、自ら漢詩などの実力を伸ばしたり、同じ考えを持つ人間などの人脈の拡張をしたりしながら、育ってきた。青年になるにつれ、本居宣長や平田篤胤の影響を受け国学への道を歩み始めるとともに元より学んでいた漢詩では周辺でトップクラスの実力と人望を得ており日野宿組合 44ヶ村の大惣代にも選任されていた。幕末期には旗本の天野氏の付き添いで京都に上洛した際、新撰組と酒杯を交わすなど新撰組の影響もあるが尊皇攘夷の思想を受けている。幕末に開国し、海外からの書物や文化をあまり、受けていない。明治になり、神奈川県議会が開設されると政恕は選挙に当選し仲間と共に国会早期開設に尽力した。その後議員活動を途中で辞め、天皇家に近づいていった。明治時代に入ってから神仏分離も行なわれ天皇の位置づけも見直された。これにより天皇家に近づく重要性が変わった。このことから、富澤家は民権思想には触れておらず、国学、漢詩、尊皇攘夷この三つの思想が富澤に大きな影響を与えていることが想像できるだろう。

¹¹ 明治天皇と富澤家との関係については、多摩市教育委員会生涯学習振興課文化財係『新撰組の人々と旧富澤家』2003年に詳しい。

第3章 五日市の豪農・深沢家

この章では、自由民権運動の代表的所産としての五日市憲法を生み出した五日市をとりあげ、その地における代表的豪農である深沢権八について述べていく。また、五日市を分析することで、多摩地域で活発な産業となっていた絹織物産業の発展などから、三多摩壮士へどのように協力していったかをみていく。

第1節 深沢家について

深沢家は五日市において、江戸時代後半より山林地主として村の代表的な存在であった。図表 3-1 でみるように、石高はそれほど多くない。しかし、後述するように、五日市という地には、農業の石高では表象しきれない経済力があつた。それは、炭や生糸、絹織物であり、こうした経済力が自由民権運動と深く結びつき、五日市憲法を生み出したと考えられる。

深沢権八は文久元（1861）年に、深沢村の名主、深沢名生(なおまる)の長男として生まれた。新学制制度のもとにスタートした勸能学舎の1期生として学び、卒業後は学務委員や深沢村の代議人をつとめ、明治9（1876）年には15歳の若さで村用掛り（村長に相当）に任ぜられる。

五日市では、自由民権運動の盛り上がりを受けて明治13（1880）年ごろに五日市学芸講談会が発足した。権八も幹事の1人として名を連ね、地域の自由民権運動の中心的人物となった。

図表 3-1 深沢家の石高の推移

西暦	元号	村高	深沢家の持高
1834年	天保5年	45石6升4合	2石9斗2升3合5勺7才
1852年	嘉永5年	45石6升4合	3石4斗8升6合3勺8才
1863年	文久3年	45石6升4合	7石4斗5升3合3勺3才
1872年	明治5年		10石余

（資料）五日市憲法草案特別展『五日市憲法草案と民権家たちの“漢詩”』展示解説より抜粋

深沢家の蔵には、商用で上京したおりなどに買い求められたと思われる大量の書籍が残されており、権八がたいへんな読書家・勉強家であったことが当時の資料によってわかっている。その蔵書は、千葉卓三郎をはじめとする学芸講談会の会員たちが大いに活用しており、彼らの学習をサポートする役割も担っていた。

また、民権家としての活動のほかに、詩人としての顔も持っていた。「武陽」などの号を用いて詩篇を制作し、700首以上の漢詩をつくり、17冊もの自選、自編の詩集を残した。

明治16（1883）年11月に千葉卓三郎が死去した際には、葬儀や遺言の執行などを取り

仕切り、卓三郎を追悼する詩を草している。

しかし同時期に権八も体調を崩しており、翌17年には入院した。そのような健康状態でありながらも、新たな結社「憲天教会」を発足させ、さらに地域における自主的な公衆衛生運動の組織「協立衛生義会」の幹事に就任した。こうした足跡からは、民権運動が退潮傾向にあった時期においても、粘り強く活動を続ける権八の姿が浮かび上がってきた。

明治21(1888)年には神奈川県会議員に選ばれているが、その2年後、明治23(1890)年12月24日に29歳で死去している。大日本帝国憲法発布、国会開設と大きく時代が変化する中の早すぎる死だった。

図表 3-2 深沢村の世帯ごとの石高

	4斗以下	5～9斗	1～4石	5～9石	10石以上	軒数合計
1834年3月	3	7	15	0	0	25
1852年3月	3	8	13	0	0	24
1872年3月	4	8	11	0	1	24

(資料) 五日市憲法草案特別展『五日市憲法草案と民権家たちの“漢詩”』展示解説より抜粋

図表 3-3 深沢家の立地と地図 (点線囲いは現在のあきる野市深沢)



(資料) Craft Map・Google マップを用いて作成

第2節 深沢家と地域の自由民権運動について

江戸時代から名主をつとめてきた深沢家の土蔵には、古くは江戸期の土地や年貢の関係文書、明治期の杉檜の注文帳など、地域の特性がよくわかる資料が残されていた。

このなかには、この地域に「五日市学芸講談会」をはじめとする結社が存在し、活動していたことを示す資料や、各地の民権家たちと交わした書簡、五日市憲法草案起草の参考としたと推測される嚶鳴社憲法草案、政治・法律関係をはじめとする多くの図書など、貴重な資料が発見された。

「東京ニテ出版スル新刊ノ書籍ハ、悉ク之ヲ購求シテ書庫ニテ蔵シテ」（『利光鶴松翁手記』）といわれるほどの蔵書は、商用などで上京した際に買い求めたと考えられている。

千葉卓三郎ら学芸講談会の会員たちは、自由にその蔵書を借り、学習のために活用していた。深沢家が「私設図書館」といわれる由縁である。

明治13（1880）年11月10日の第2回国会期成同盟大会で憲法の起草が議され、翌年の第3回大会に各自草案を持ち寄ることが決議された。このため、全国各地の自由民権グループが私擬憲法¹を作成した。

千葉卓三郎の起草した草案の標題は「日本帝国憲法」だが、発見者は、千葉の知識や個人的な資質が、五日市を中心とする地域の人々との交流や協力により磨かれ、地域の自由民権運動につながっていること、さらに五日市学芸講談会や学術討論会では、様々なテーマの討論、検討がなされており、五日市の地域社会と切り離して考えられないことから、この草案を『五日市憲法草案』と名付けた。5篇204条に及ぶ大作で、和紙24枚に細かな文字で清書されている。

昭和43（1968）年に東京経済大学教授である色川大吉によって、深沢村の旧深沢家の土蔵から発見され、民衆憲法として広く紹介された。色川は三多摩壮士を語る座談会の中で「今、日本に残っている三十種類の民間草案の中で、五本の指に入るすばらしい草案です。」と評価している。

現在は、五日市中学校敷地内に「五日市憲法草案の碑」と「建碑の辞」があり、建碑の辞の裏には、五日市学芸講談会員ノ名簿が記されており、千葉卓三郎を始めとした会員の氏名が残されている。

五日市憲法を起草した主役は千葉卓三郎である。千葉卓三郎は1852年（嘉永5年）に宮城県栗原郡白幡村（現在の志波姫村）に仙台藩の下級武士の息子として生まれる。戊辰戦争の敗戦を経験した後、仙台藩で医学などを学んだ後上京する。

上京してからも勉学に励み、儒学・洋算を学ぶ。明治10（1877）年に秋川に入り、各地で教職として従事した。その後、明治13（1880）年に五日市に下宿を始め、五日市の勸学校に勤め始める。同じ時期に五日市学芸講談会を結成する。結成した後の明治14（1881）年の上半期に五日市憲法が創案されたとされている。創案後は五日市を離れ、勸能学校に戻るが、明治15（1882）年に結核が進行したために療養を始める。その翌年の明治16（1883）年11月12日、本郷竜岡病院にて死去した。31歳であった。

第3節 深沢家の自由民権運動を支えた生糸・絹織物

明治以降の自由貿易の開始によって、わが国の輸出の主力産品となっていたのは、生糸と絹織物である。

生糸が開港後ほどなく主要輸出品となりえたのは、開港直前までに国内商品として大量に流通するにいたっていたことの結果であるが、国内における生糸の総生産量・商品化量は幕末期については不明である。幕末・明治初年の輸出量と生産費の関係をみると次の表のとおりである。明治5(1872)年にいたるまで、ほぼ100万斤を前後する輸出がみられ、その頃まで生産数量は不明であるが、「農産表」により生産量の判明する最初の2年度の平均が200万斤となっている。このことからすれば開港当初における100万斤近い輸出は、当時の商品化量のきわめて多くの部分を輸出に廻したことを示しているといっていよう。江戸時代後期においては、生糸の流通は京都の和糸問屋に握られていた。和糸問屋は株仲間の特権を認められ、多額の前貸金を産地に与えて生糸を集め、西陣を中心に絹織物地帯に供給していた。江戸には糸仲間があつて東北地方の生糸の仲買の仕事を行っていた。文化・文政期以降桐生をはじめとする地方絹織物産地の興隆があり、西陣の独占的地位は徐々に弱まり、西陣への生糸の供給も、文化・文政頃の2万梱から、以後安政5(1858)年までの30年間には1万3000~4000梱に減少していた。地方絹業地に生糸を供給する地方商人の独自の活動がみられるにいたっていたのである。このような商品化の状況が貿易の開始とともに、生糸産地の農村商人の活潑によって横浜に大量の糸を集荷させる条件となったといっていよう。

図表 3-4 生糸・絹織物の貿易量の推移

	横浜港輸出量 (斤)	全輸出量 (斤)	生産量 (斤)
万延元年～文久2年 3年平均	86万 7330		
文久3年～慶応3年 5年平均	124万 4620		
明治元年～明治5年 5年平均	95万 1100	95万 459	
明治6年～明治10年 5年平均		179万 3627	200万 1000
明治11年～明治15年 5年平均		184万 7060	328万 4000

(資料) 古島敏雄編『体系日本史叢書 12 産業史Ⅲ』山川出版社、1964年、56頁「第7表 生糸輸出量と生産量」より作成

輸出の増大は、単に従来国内絹織物に用いられた原料糸が売先を変更しただけに止まるものではない。市場に持ち出された生糸が高い価格を求めて、従来の仕向地から横浜に向けられることに発した輸出への動向は、産地価格を高めることを通じて産地を刺激した。この間の事情は「五品江戸廻し令」をめぐる、糸問屋の幕府への口上書によってほぼ知ることができる。文久3(1863)年6月の一文書は、外商・生糸売込商・産地買集商などが生産者に働きかける事情を記している。生糸生産が半減だと各地で言われる文久3(1863)

年でも、日々貿易に廻される荷高は増えている。この年の8月の一文字書は幕府の間に答えて、開港後4年目と5年目にあたる文久2(1862)年～文久3(1863)年の開港前に比しての増産のありさまを、概数でのべている。養蚕・製糸地帯は遠国であり、各地で絹織物の原料に用いるものもあり、繭で買入れて他所で糸に挽くものもあって、正確には分からないが、古島編(1966)によれば、諸国の糸商人よりの聞取りをもとに概数をのべるとして、次のような内容を述べている。

「文久2(1862)年の作柄は地方により、7・8分、8・9分などとなっているが、糸問屋の見るところでは10分の作とみられる。その生産量は開港前に比べると、開港前を100として280位にあたる。

文久3(1863)年は各地とも半作だと唱えているが、これより多く6分作に近い。産額は指数でいえば160ないしは170とみてよい。全国的にこのようにみられるが、その増産の程度は地方によって差がある。広大な地域をしめ従来の産額も多かった奥州・羽州は他地方ほどには増産せず、文久2(1862)年で5割増位、文久3(1863)年で3割増位と考えられる。」¹²

第4節 自由民権思想の摂取を可能にした浜街道

横浜が開港されて、日本の商人は外国の商人の欲しがるものを探した。その1つが生糸であった。これは当時非常に売れた。理由はヨーロッパで起こった蚕の疫病である。それと中国で起こった太平天国の乱の影響で輸出できない状況にあった。これが原因であったと推測できる。そこで白刃の矢がたったのが日本であった。日本の生糸が中国に負けじと劣らぬ上質のものであったことも理由の1つである。そのため全国各地から横浜へ生糸が買い集められ、運ばれてきた。この生糸が運ばれた道にはさまざまな道筋があった。そのなかで、もっとも重要な道が八王子と横浜をむすぶ「浜街道」である。

八王子と横浜とその周辺地域はこの2つの地域は開国と同時に、広い世界と直接に広い世界と直接結ばれるようになって大きな変化があった。このようなことから浜街道の果たした役割は従来の多摩地域に世界の影響を伝えることと、横浜の開港場に鐘水商人らが生糸を運び、利益を得ると双方にいいことづくしであったのではないか世界との繋がりを見ながら生糸とは2つの時代で大きな役割を果たしていた。

八王子の先にあるのが五日市であり、五日市の産物は八王子を經由して浜街道を歩き来し、海外へと運ばれたのである。

¹²古島敏雄編『体系日本史叢書 12 産業史Ⅲ』山川出版社、1966年。

図表 3-5 浜街道における関連年表

西暦	元号	出来事
1854年	安政元年	ペリー浦賀来航
1858年	安政5年	日米就航通商条約
1860年	万延元年	五品江戸廻送令
1908年	明治41年	横浜線開通(八王子-横浜)

第5節 五日市憲法を生み出した多摩地域の経済的特性

深沢家が生きた五日市とはどのような地なのであろうか。五日市の地名の語源は戦国末期にさかのぼる。このころ、この地で5の日の定期市が開かれており、この定期市によって地名が名付けられた。さらに徳川時代に入って、江戸に大消費都市が出現し、五日市は炭の取引市として再興され、江戸を取り巻く地廻り経済圏の一環として繁栄した。

秋川谷の炭の生産地は檜原・養沢村などの山方である。五日市は炭と穀の交換市となり、山方と里方の出会いの場となった。五日市村の百姓たちは市の場所代稼ぎに甘んじないで、取引に介在する商人となり、さらに江戸中期、炭の物品税の取り立てを委任されたことから専売権をもつ炭問屋に成長した。

炭以外の秋川谷の主要産業に山地を利用した林業がある。江戸中期頃から杉、桧の林業が盛んになり、木材は筏に組まれ、秋川から多摩川を経て江戸へ運ばれた。

この林業は有力な元締め（材木商）を生み出すと同時に多数の農民に林業労働者としての雇用の機会を提供した。今一つ秋川谷の重要産業は、江戸後期盛んになった黒八丈という絹織物である。八丈織りの技法を取り入れたこの織物は、泥染の絹織物で高価で、通称「五日市」と呼ばれ、全国に普及した。

主要地は秋川・平井側流域で、製品は五日市、八王子を経由して全国ルートに乗った。五日市はそれぞれの取引に主役の地位を確立してきた。

こうした中、五日市村の有力商人の中には卓越した金融力をもって、広大な山林を所有する富農も発生した。この代表格が深沢家なのである。

さらに、五日市は、秋川谷は多摩川という大動脈によって川崎方面と直接結ばれていた点に着目しなければならない。当地方の人々にとって、文明開化の根源地、開港場横浜は案外手近な場所であったと思われる。深沢家から手書きの蒸気船図も見つかっている。

こうした地域の持つ特性が、自由民権思想に触れるには有利に働くことになる。深沢家には幕末から明治初期に発刊された翻訳書籍類が多数所蔵されていたのである。

第6節 まとめ

千葉卓三郎や深沢名生・権八らが五日市で中心となって学芸講談会や五日市憲法の草案などを行ったが、これらには千葉卓三郎の博識と豪農であった深沢家の蔵書を私設図書館

として自由に利用し知識を得ていた。五日市の学芸講談会の会員にとって博識の千葉卓三郎と豊富な蔵書を持つ深沢家は切っても切れない関係であったといえる。

また、深沢家をはじめとした養蚕業を営む農民は開国の影響で五日市の特産品といえる黒八丈が暴騰し、大打撃を受けた。しかし彼らはめげることなく黒八丈の増産を続けた。その結果、養蚕がこの地域の有力な産業となった。また、五日市で作られたものは、八王子や絹の道をつたって横浜へ行き、そこから海外へと巡っていくことになった。海外への輸出が行われるようになると、海外からの輸入品が横浜から絹の道を通して五日市へとやってきた。その代表が深沢家に眠っていた蔵書である。

また、村には在方商人が地域の有力者として存在しており、その指導力を発揮していた。その中で地域の外からもたらされる文化を受容する地域特性が作られていった。外の文化を受容する地域特性が生まれたからこそ、今までの視点と異なる見解が生まれ、五日市憲法が生まれたのではないだろうか。

以上の条件が組み合わさったことにより、下級武士と豪農が協力して私擬憲法が生まれたのだろう。深沢は「名望家志向的な豪農」といえるだろう。

その一方で、深沢家自体は経済的に恵まれており、活動の中心は五日市学芸講談会であった。それゆえに困民との関わりは薄かったと言える。そのために地位が低下していく農民などの立場に立つ機会がなかったと言える。こうした点から深沢は思想的かつ理論的な自由民権運動が中心となり、激しい運動の中心人物にはなり得なかったのではないかと推測される。

深沢は積極的に海外からの文化を取り入れるために、多くの書籍を集めていた。この取り組みは天皇を尊び、外敵を撃退しようとする「尊王攘夷」の動きとは反するものがある。

一方で、人民が政治に参与する権利を主張した民権思想を多く取り入れた五日市憲法を草案するなどの取り組みを行ってきたが、その草案は全ての人意見が取り入れられたものではなかった。そのために、三多摩壮士にはなりえなかったのではないかと考える。

第4章 原町田の豪農～石坂昌孝の組織活動～

第1節 三多摩壮士とはどのような人物か

この章では自ら三多摩壮士となり、その活動の中心的人物でもあった石坂昌孝を取り上げる。石坂昌孝の活動を通じて三多摩壮士の組織活動に着目し、三多摩壮士たちが、どのような考えを持って自由民権運動に取り組んでいたのかを組織の活動を探っていく。

壮士とは、明治時代に自由民権思想の普及のため、政治活動に奔走した行動的青年のことを指している。彼ら壮士たちの中でも三多摩地方の壮士たちは数ある地方の壮士たちとは違って固有名詞として残るほどの壮士たちであった。彼らは一体どのような人物であったのかを探ってみるため、三多摩壮士の指導者と言われる石坂昌孝をピックアップし、三多摩壮士とはどのような人物であったのかを探っていく。

第1項 三多摩民権運動の最高指導者「石坂昌孝」の生い立ち

石坂昌孝とは三多摩地方の民権運動において最高指導者であった人物である。それでは、彼の生い立ちから三多摩壮士とはどのような人物であったのかを探っていく。

『1841年（天保12年）6月11日、武州多摩郡野津田村の石坂清右衛門家に生まれる。父は吉恩、母はほん。昌孝は生まれおちると7日にして母ほんの実家である同村の石坂又二郎家にもらわれた。義父を昌吉という。この又次郎家は村の5分の1を占めるほどの資産を持つ豪農であり昌吉は名主職であった。昌孝の義父である昌吉は祖先の遺訓ともいべき質素さ、つつましき、厳しさを兼ね備えた武士的な人間であったが、幼少期の昌孝は自由奔放に育ったといわれ、「子どもの頃の彼は踊りが好きで近所の子どもを集めて踊りばかりおどっていた。勉強もあまりせず、これはという時にならないとやらない。そのくせ、やらせればなんでも一番だった。」と幼な友達であった儀右衛門は語っており、この頃から指導者としてのカリスマ性を窺わしている事がわかる。

1857年（安政4年）昌孝が16歳の時に義父の昌吉が55歳で他界。昌孝は若くして石坂家の名主となり隣村の義兄弟である小島為政の指導を受けながら名主として成長していく。石坂の名主時代は日本が明治維新を迎えるため陣痛の悩みを続けていった。そういう重みとともに、石坂のもっとも頭をいためた問題はよってくるころの農民の賦課の重みであったろう。1866年（慶応2年）は江戸時代における百姓一揆のもっとも多かった時期であるが、石坂は農民の窮境をみるにしのびず、ついにたちあがり、身をもって代る覚悟で命を斥けて農民を救った事もあった。

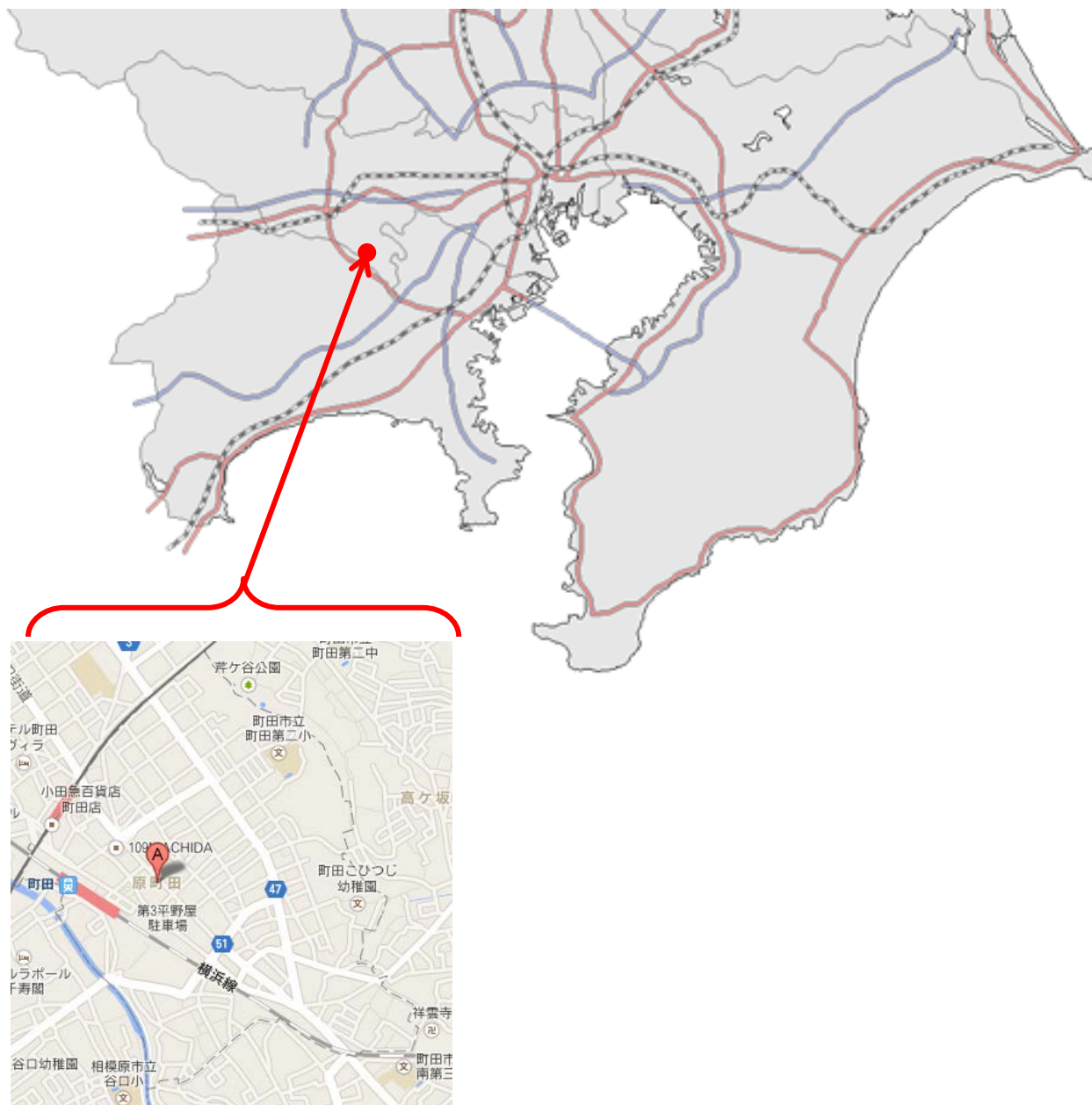
1871年（明治4年）には第8大区（現町田市、稲木町、多摩村、由紀損、日野町の一円）区長にまでなる。』¹³

ここまでが石坂昌孝の自由民権運動に至るまでの簡単な生い立ちである。昌孝は村一番

¹³ 渡辺奨「石坂昌孝の生涯」（その1、その3）『多摩文化』、1966年。

の豪農であった昌吉のもとで育ち、名主としての指導を受け、村の区長を務めるほどの指導力と資産を持っていた。また、彼は幼い頃から人を引き寄せるカリスマ性を兼ね備えていたと共に、自由奔放に育ったとはいえ義父の昌吉から「質素さ、つつましき、厳しさ」を肌で感じながら育ってきたのではないだろうか。

図表 4-1 原町田の地図



(資料) Craft Map・Google マップを用いて作成

第2項 神奈川自由党の入党者の経歴

三多摩壮士の最高指導者であった石坂昌孝は村一番の豪農で区長を務めるほどの指導的地位にたつ人物であったが、他の三多摩壮士たちも彼のような人物が多かったと、後に多くの三多摩壮士が入党した神奈川自由党の入党者の経歴からもわかる。

『神奈川県自由党は正式入党者だけでも総員 287 名（全国で第 2 位）。その中心は三多摩であり、とくに南多摩郡に全党員の 3 分の 1 が集中していた。この南多摩郡全党員の半数を占めている中堅の党員 44 名をしらべてみると、そのほとんどが豪農に属する者であり、そのうち 3 分の 1 ほどがこの前後に県会議員の経歴をもつ者であることがわかる。さらに、村役人、村総代、または戸長、副戸長、学務委員などの要職の経歴者を数えたとしたら大部分がそのどれかに該当している。つまり、かれらは村落の指導的地位を持った地方名望家層といえることができるのである。こういう特徴はもちろん南多摩郡ばかりではない。相州の高座郡、愛甲郡、淘綾郡などの諸郡では、党員といえればほとんどが県会議員か戸長というところもある。このことは神奈川県自由党の第一の特徴であろう。』¹⁴

このことから多くの三多摩壮士は「豪農」であり「指導的地位」にたつ人物であったことは明白である。しかし、多くの三多摩壮士は指導的地位にたつ人物であったことについては間違いはないが、「豪農」であったという点については次のような特徴があったと先ほどの文献の続きに述べられている。

『また、この豪農層の党員を土地所有の別で A、B、C の 3 つのクラスに分けてみると、ほとんどの活動家党員は C クラスの中に名前を見つけることができる。いまここで C クラスというのは所有地価 400 円以上 2,000 円までの地主を想定している。たとえば、この C クラスの中には、当時の石坂昌孝、村野常右衛門、林副重、土方啓次郎、土方房五郎、若林高之亮、若林三右衛門、森久保作蔵、小林儀兵衛、井上光治、中溝昌弘、山口重兵衛というような著名な指導者が含まれているのである。つまり、この田畑約 2、3 町歩程度の小地主層=C クラスに自由党活動家の大部分が所属しているということ、換言すれば、没落傾向にある小豪農主導の自由党、これが神奈川自由党の第二の特徴であろう。』¹⁵

三多摩壮士たちは自由民権運動の為に自らの資産を莫大に費やしていたため、豪農の中でも没落傾向にあったということである。それを象徴する人物が最高指導者であった石坂昌孝だ。彼の地価額の推移をしらべてみると、1878 年（明治 11 年）に 5,316 円だったのが 1885 年（明治 18 年）には 1,570 円まで減少している。これは石坂昌孝が自由党の幹部

¹⁴ 色川大吉『流転の民権家』大和書房、1980 年、55 頁

¹⁵ 色川大吉『流転の民権家』大和書房、1980 年、56 頁

として自由民権運動に精力的に奔走していた頃だ。石坂昌孝には次のようなエピソードがある。

『彼が 10 歳の時、ある人が義父の昌吉に「この子は将来役に立ちそうない倅だ」とほめた。これに対し、「イヤ、彼如も家を守る位で潰すようなことはとてもできない」と答えた。ところが昌吉の望みどおりに昌孝は 27 町歩余の豪農石坂家の資産を一代にして見事使い尽くしてしまった。』¹⁶

石坂昌孝にとって自由民権運動の高揚から激化までの 5 年余は神奈川自由党を引きつれ、そして本部自由党の幹部としての東奔西走の政治活動はいくら財産があっても湯水のごとく流れるのは自然の理である。だが、その献身的な努力があったからこそ、「自由党のとりで」といわれるようになった神奈川自由党の礎石をつくったのだ。

以上のことから、三多摩壮士の多くが豪農層の中でも没落傾向にある小豪農であり、過去に県会議員などといった指導的地位にたったことのある人物だと判明した。没落傾向になった要因としては国家の収奪と不況の影響もあったが、もっとも大きな要因は自由民権運動のために資産を費やしたことであろう。

次の節では三多摩壮士がどのような人物であったのかという特徴を把握した上で、彼らが莫大な資産を費やしてまで成したかった自由民権運動の目的である立憲政体を実現するために個人の力を結集させた組織である政治結社がどのような役割を果たし、さらにはどのようにして神奈川県下の大同団結に至ったのかを探っていききたい。

第 2 節 神奈川県下大同団結はどのようにして成し遂げられたのか

この節では石坂昌孝が主唱し成立した、神奈川県で最大勢力を誇っていた自由党色の南多摩の民権結社「融貫社」の特徴を探り、立憲改進黨色であった「自治改進黨」にも触れながら、どのようにして神奈川県の大同団結が成されたのかを紐解いていきたい。

第 1 項 政治結社「融貫社」の特徴

『自由民権運動の幕が落とされてから神奈川県下の全域に様々な民権結社が、次々と誕生していった。1880 年（明治 13 年）から 1883 年（明治 16 年）にかけて、組織された民権結社の数は 100 社余にもものぼっている。この幾多ある結社には 3 つの潮流があるといわれている。民撰議員設立建白書にはじまる士族を中心とする愛国者の潮流、首都東京に住む知識人のグループである都市民権派の潮流、そして県会議員を中心とする豪農層による在地民権結社の潮流の 3 つである。三多摩の民権運動はこのうち在地民権結社の潮流に属する。』¹⁷

¹⁶ 渡辺奨「石坂昌孝の生涯」（その 1）『多摩文化』1966 年、P28

¹⁷ 梅田定宏『三多摩民権運動の舞台裏』同文館、1993 年、22 頁。

三多摩の自由民権運動は在地民権結社の潮流に属するものであった。その代表的な民権結社が 1881 年（明治 14 年）11 月に南多摩郡で成立した「融貫社」である。

融貫社は石坂昌孝の主唱によって、南多摩郡の村野常右衛門、細野喜代四郎、青木正太郎、林副重、北多摩郡の吉野泰三、中村克昌、高座郡の山本作左衛門、都筑郡の佐藤卓幹、金子馬之助、桜井光興の発起で結成された。この融貫社は武蔵・相模の広範囲にわたる地域をまとめた地方政社で結成時には武相 6 郡の民権家 150 名が参加した。

融貫社の規則は、緒言でまず、

『ロアリテ言フ能ハザル之ヲ啞ト云フ、耳アリテ聞ク能ハザル聾ト云フ、夫ノ啞ト聾トハ、人間天賦ノ自由ヲ失ヒ、幸福ヲ享有シ能ハザル者ニシテ、人生ノ不幸焉ヨリ大ナルハ莫シ』¹⁸と述べて言論の自由を強調している。つづいて規則本文では、

『本社結合ノ目的ハ、民権ヲ恢服シ、国権ヲ拡張シ、国民本分ノ義務ヲ講明シ、我国政体ノ改良ヲ似テ創立ノ基礎トナス』¹⁹と結社の目的をうたっている。

この融貫社規則はすでに 8 月に成案されていたが、その後の政情の変化とともに豪農民権運動の実態に即応するような新たな「融貫社規則」が成立した。その融貫社規則の第一章通規第一条に目的が記している。

『本社ハ民権ヲ拡張シ国民本分ノ権利義務ヲ講明シ我国立憲政体ノ基礎ヲ確立スルヲ似テ目的トス』

8 月の規則に比べ、その目的に民権思想の前進が読み取れ、1881 年（明治 14 年）11 月の自由党盟約後の地方政社の創立に影響があったことを知ることができる。それは「恢復」「改良」の表現が「拡張」「講明」となっていることによってもわかる。それは『石坂等在地の豪農民権家により手なおしされたものと思われる。』²⁰ということである。

融貫社は、規則の変化からみても結成時からいち早く自由党系であることを表明し、地方部の設立を目論んでいた自由党の意図を読み、南多摩郡に限った政社ではなく、支社を分設して神奈川県全域を対象とするものとなっていった。これは融貫社に神奈川県自由党支部としての役割を果たすことが意識されたためであるといわれている。融貫社の主唱者であり指導者であった石坂昌孝の目指すところは神奈川県の大同団結で、それはすなわち自由党の傘下に馳せ参ずることであった。この神奈川県大同団結のため石坂昌孝は県下くまなく東奔西走し、自由党色を広めていった。

¹⁸ 大畑哲『神奈川の自由民権運動』新神奈川社、1981 年、39 頁。

¹⁹ 大畑哲『神奈川の自由民権運動』新神奈川社、1981 年、39 頁。

²⁰ 渡辺奨「石坂昌孝の生涯」『多摩文化』、1966 年、150 頁。

第2項 立憲改進黨色であった自治改進黨の存在

三多摩の自由民権運動は融貫社のような在地民権結社の潮流に属するものであったが、自由民権運動の開始には都市民権派の影響を受けた。特に北多摩郡はその影響をもっとも強く受けた地域であった。都市民権派とは、官吏、ジャーナリスト、代言人（弁護士）、教育者などからなる民権グループで嚶鳴社、共存同衆、校詢社、国友会などがその代表的団体であった。彼らは知識人として、新聞、雑誌、あるいは演説会、討論会などを通して、自由民権思想を広げる積極的役割を担った。三多摩、とくに北多摩郡は東京に近かったことから、都市民権派の影響を強く受けた。

現在判明しているところによれば、北多摩郡に結成された民権結社でもっとも早いのは狛江に起こった交潤講益社である。結成の時期は第三回愛国社大会が開かれた1879年（明治12年）11月ごろであると言われている。その「緒言」にはつぎのように述べられている。

『今般結社スル目的ノ大意タル人最モ第一緊要ナル知識ヲ交換シ、似テ世務ヲ諮詢スルニ在リ、抑モ学問ノ道ハ学校ノミニ非ス、又読書ノミニ在ラズ、学校ニ入テ諸科ノ学ヲ学ビ、家ニ在テハ百家ノ書ヲ読ムモ限アル一人ノ力ヲ以テ千緒万端、此多忙ナル世ノ中ノコトニ当ラントスルハ、逆モ叶フ可キコトニ非ス、況ヤ家ノ都合又身ノ有様ニ由リテ読書学問ノ余暇ナキ者モ多キニ於テヤ、サレハ人々雅俗ノ別ナク其知ル所ヲ人ニ告ケ、知ラサル所ヲ人ニ聞クハ最モ大切ナルコトニシテ、譬ヘハ我カーツ知ルコトヲ十人ニ告ケ、十人ノ知ルコトヲ我ニ聞ケハ即チ一ヲ以テ十ニ交易スル割合ナリ、故ニ今回真ノ有志者ヲ募リ以テ交潤講益ノ基ヲ立ント欲ス』

この最初の部分は、「本社ノ目的ハ社員タル者互イニ知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スルニ在リ」という、都市民権結社である交詢社の「社則」の条文とほぼ一致する。狛江では結社づくりの参考に交詢社の「社則」を取り寄せ、それをもとに結社づくりに取り組んだのである。そして、1880年（明治13年）の春ごろには、甲州街道の五宿駅（上石原、下石原、上布田、国領の五宿、通称布田五宿）で東京嚶鳴社員を招いた定期的な演説会も開かれるようになった。北多摩郡は都市民権派の交詢社、嚶鳴社の影響のもとで自由民権運動に参加し始めたといえよう。²¹

嚶鳴社グループは1882年（明治15年）に自由党とは違い、立憲改進黨に参加したグループで立憲改進黨色の政社である。この影響を強く受けたのが北多摩郡で1881年（明治14年）1月には、吉野泰三、本田定年、中村克昌、中島治郎兵衛、比留間雄亮、横川規一らを中心として北多摩郡全域を組織範囲とする民権結社「自治改進黨」が結成された。会員数は140名であった。自治改進黨の総則第一条はこのように記されている。

『我党ノ主義ハ人民自治ノ精神ヲ養成シ、漸ク似自主ノ権理ヲ拡充セシメントスルニ在リ』

²¹ 梅田定宏「三多摩民権運動の舞台裏」同文館、1993年、P22

自治改進黨社長の砂川は郡長で、幹事 5 人のうち 3 人が郡書記、幹部 7 人のうち半数以上が郡吏であった。すなわち郡役所の吏員がそのまま自治改進黨の実質的な指導部となっていたと考えてさしつかえないだろう。郡の行政組織を使って組織化がはかられたとなれば、当然「自治」「漸」を強調したものになる。

この自治改進黨は、村の代表として黨員となったものが高い政治的意識をもたなかった。その結果、吉野らの意図と反して、党としてのまとまりを欠き、活動がほとんどされなくなっていった。²²

三多摩では自由党色を表明していた南多摩郡の融貫社の他に、都市民権派であり後に立憲改進黨に入党した嚶鳴社グループの影響を強く受けていた北多摩郡の自治改進黨という政社などもあった。ではこの考えの違った政社たちが、どのようにして大同団結を成し遂げたのかをみていきたい。

第 3 項 神奈川県下大同団結はどうやって成し遂げられたのか

『1881 年（明治 14 年）10 月、国会開設の詔が出されたことによって日本最初の近代政党である自由党が成立。初代総理（党首）に板垣退助、副総理には中島信行が就いた。自由党は成立後、地方の啓蒙活動に力を入れ地方部設立を運動方針として掲げた。東京で地方部が設立されたのを機に続々と各地に地方部が設立され瞬く間に自由党は地方部 30 余ヶ所、黨員 5 万人余を数える大政党に飛躍していった。

その流れを止めるかのように政府は集会条例追加改正を公布し圧迫を強め、自由党は組織そのものを改変せざるをえなくなった。これは政党の組織活動に大きな影響をあたえ、各地方政党は地方部を解散し、東京の自由党に直接加入せざるをえなくなった。集会条例追加改正により中央政党の脈路をたたれ第二の段階にはいることになった。すなわち、『地方政党は自分たちの政社を改選して自由党、立憲改進黨に入党をするか否かの岐路にたたされた。この時、神奈川県でもっとも態度を鮮明にしたのが、融貫社グループである。石坂昌孝は村野常右衛門、青木正太郎、井上光治、渋谷三郎、佐藤卓幹、桜井光興、黒田尚雄、若林三右衛門、安藤忠兵衛、若林高之亮をひきい率先入党をした。自由党臨時大会に出席した相愛社系（嚶鳴社よりの厚木町の結社）も融貫社と相同じくして 8 名が入党した。したがって神奈川県は融貫社、相愛社系により自由党入党の火ぶたがきられたといつてよいのである。』²³

神奈川自由党には融貫社系 35 名、自治改進黨系 25 名を含め、計 116 名が入党した。ここで疑問が生じるのは、嚶鳴社の影響をもっとも受けた自治改進黨系や、相愛社系のグループが、なぜ自由党に入党したかということである。それは、立憲改進黨への入党状況か

²² 梅田定宏「三多摩民権運動の舞台裏」同文館、1993 年、P38

²³ 渡辺奨「石坂昌孝の生涯」、多摩文化、1966 年、P157

ら読み取ることができる。

渡辺（1966）の記述によってその詳細を知ることができる。すなわち、『民権昂揚において神奈川県下は嚶鳴社の多大なる影響下にあった。それならば立憲改進黨への入党はどうかとみると、意外な数に驚かされる。島田三郎（相愛社）、肥塚龍をふくめて 16 名にすぎない。そのほとんどが横浜区であって、郡部は皆無にひとしい。この入党結果をみて考えられることは、民権派ジャーナリズムの嚶鳴社の影響下にありながら、なぜ自由党になびいたかということである。その原因には 2 つのことが考えられる。1 つは啓蒙運動の内質に問題がある。2 つは入党に主動力をもったと思われる県議クラスに原因がある。まず、その 1 つである啓蒙運動の内質にはどのような問題があるかということである。神奈川県下に影響をあたえた嚶鳴社にどのような意図があろうと、これを受容する豪農民権運動には基盤がある。豪農、農民が学習する基盤は大きく分けると、①自由党、立憲改進黨の団結結集のためのもの、②政治思想の啓蒙、③法律経済等となる。その学習をみると②と③が圧倒的に多い。そのことは自由党系立憲改進黨系末文のままの政治思想、学術研究のための演説会懇親会であった。彼等にとっては中央の著名の民権派ジャーナリストであればよい。その 2 の県議クラスの影響が多大であったことは県議クラスに 16 名の入党者が占められその入党が 1882 年（明治 15 年）に完了していることである。このことは 1882 年（明治 15 年）初めに各政社の主動力を県議クラスがにぎり、これにより各政社の入党を促進した。また、県議会は郡部と区部とは根づよい対立がある。そのため郡部も嚶鳴社の影響下にそだったにもかかわらず、県議クラスの促進により、郡部は大きく自由党になびき、区部は立憲改進黨へと進んだものと思われる。』²⁴のである。

条例追加改正後、民権派ジャーナリストの地方啓蒙が停止し、神奈川県下の各政社はその思想に変化があったのではないか。自治改進黨も融貫社員の自由党率先入党後に自由党の堀口昇、馬場辰緒、立憲改進黨の肥塚、丸山名政、角田真平を招いて演説会をひらいている。このことは北多摩郡の困迷をしめすものである。自治改進黨を含め、各政社の三多摩壮士たちは、融貫社の石坂昌孝ら県議クラスの強力なる推進が展開されたことによって、似通った思想を形成していき、立憲政体を成し遂げる為、小異を捨て大同団結に踏み切ったのである。

次の節では神奈川県下大同団結を果たしたが解党に追い込まれた三多摩の自由党員を追い、大阪事件へ暴徒化していった人たちをピックアップし、彼らはどんな想いで大阪事件に関与していったのか、また彼らは三多摩壮士であるのかということを知りたい。

第 3 節 暴徒化していった三多摩壮士～大阪事件に関与した彼らの心中～

石坂昌孝ら県議クラスの三多摩壮士たちの影響があり、自由党入党というかたちで大同団結を果たした神奈川県であったが、自由党では大井憲太郎をシンボルに党中央の党勢に服さない急進派の力が増大し、数々の激化事件を起こすようになっていく。その結果、1884

²⁴ 渡辺奨「石坂昌孝の生涯」（その 1）『多摩文化』1966 年、159-160 頁。

年（明治 17 年）自由党は解党まで追い込まれ、神奈川自由党の運動も、結局、自由党の解党をきっかけに挫折するようになった。そのようななか、翌年の 1885 年（明治 18 年）に組織を立て直し、運動を再建しようという動きが生まれていった。その 1 つが朝鮮に乗り込みクーデターを起こして独立党を政権につけ、そのことによって生じる日清間の緊張、民衆のナショナリズムの高まりを利用して、政府に国内改革の実行を迫ろうとした「大阪事件」である。

この、大阪事件には村野常右衛門ら多くの三多摩壮士たちが関与していた。この節では大阪事件に対して、彼らはどのような思いで関わっていったのかを紐解きながら、自由民権運動に対する彼らの真意を突き止めていきたい。

第 1 項 大阪事件に関与した三多摩壮士の目的

『大阪事件の弁護士、小林幸二郎は、村野常右衛門の弁護の時に、事件に参加した壮士たちの行動について 4 つのタイプを示した。大阪事件に参加した者は、内地改良、朝鮮独立援助、中国進出、或いは東洋アジア改良の手始めと朝鮮改革計画にそれぞれの異なった夢をいただいていた。

4 つのタイプのうちで、色川大吉氏は「村野常右衛門伝」において、神奈川県グループの注目すべきところとして内地改良を主張するものが多かったと述べられる。

当事の社会状況は、1881 年（明治 14 年）以降の地方財政によるデフレ政策によって恐慌に陥っていた。このような状況を何らかの方法、手段によって解決しなければならないと地方指導者は迫られていた。そこで遭遇したのが朝鮮改革計画だ。

“内地改良”とは何か。それについて大阪事件の弁護士、小林幸二郎は「朝鮮計画は内地革命の事件として之に同意したるものあるべし」と法廷で述べているように、革命を意味しているわけである。地方財政の恐慌状況を革命という手段によって打開していこうという支持者が大阪事件に与していったと推測されよう。』²⁵

大阪事件研究会の『大阪事件の研究』では、色川大吉氏の『村野常右衛門伝』のなかで、神奈川県の大阪事件に関与したグループの多くの人々は内地改良を目的に大阪事件に参加したということが記されている。これは、三多摩壮士たちが民権運動の最中、政府の財政政策により、恐慌状態に陥った故郷を暴徒化してまで救おうとしたとも読み取ることができるのではないだろうか。彼らは、地方指導者として故郷の人々を深く心配し、確固たる信念のもと、この大阪事件に関与したのであろう。

第 1 節で記した、三多摩壮士の特徴の続きとして、色川大吉氏は「流転の民権家」のなかで、このようなことを記している。

『没落傾向にある小豪農が最後まで自由党指導の中心に残ったということはおのずからその運動の性格をはげしいものにする要因をもっていた。東日本において自由党急進派と

²⁵ 大阪事件研究会（松尾章一）『大阪事件の研究』柏書房、1982 年、219-220 頁。

いわれた大井憲太郎一派が、在地の地主民権家に大きな支持を得ていたのはこのあらわれであろう。』²⁶

このことから、一定の三多摩壮士たちが暴徒化していったのは、彼らの特徴の 1 つとしてあげた「没落傾向にある小豪農」であったことが要因であったと推測できる。自らの資産の多くを費やしてまで自由民権運動の目的である立憲政体を成し遂げようとした三多摩壮士たちがこのような傾向に走ったのも納得できる。

暴徒化し、大阪事件に関与した三多摩壮士たちの大阪臨時重罪裁判所公判中に起こった興味深い出来事が次の文献に記されている。

『1885 年 (明治 18 年) 11 月 26 日は、大阪事件が発覚し全国的に旧自由党左派に対し、一大弾圧が下った日である。政府は自由党再建の息の根を止めんとして、大阪事件関係者摘発に乗り出し、この早暁を期して 101 名を逮捕し、捜査線上に現れたブラックリストの党員は、翌年に至るまで続々と取調べを受け、各署に分散留置の上、未決監に強制拘留処分に附したが、三多摩壮士はむろん多数に及び、とくに村野常右衛門、長阪喜作、山本与七、菊田条三郎、大矢正夫、佐伯十三郎、難波春吉、山川市郎、窪田久米、霧島幸次郎ら予審 1 年有余、1891 年 (明治 24 年) 4 月 14 日、58 名の起訴者の中にその名がみられ、大阪臨時重罪裁判所公判となった。この公判に出廷した全被告は「自由」と染め抜いた黒紋付をきて、毅然とし 94 回の公判を終わって 9 月 24 日の判決言渡しで、霧島は無罪放免、村野は外患罪で軽禁固 1 年監視 10 ヶ月、他は座間役場襲撃事件で強盗罪、制縛罪で各々重刑を課せられたのである。』²⁷

公判に出廷した全被告が「自由」と染め抜いた黒紋付を着用していたということが記されている。彼らは徹底して自分たちの目的達成への強い信念を貫いていたのだ。この大阪事件に関して直接関わりは無かったといわれる三多摩自由民権運動の最高指導者、石坂昌孝は興味深い歌を残している。それは、獄中にある村野に贈ったものであり、思想表現資料に乏しい昌孝の貴重な資料となっている。

『国事犯の疑ひかかりて 邨野長人が獄に入る折りそめよる
くのためにこゝろ筑紫の剛男が赤き心の道しるへかも』

昌孝はこの歌で、村野常右衛門の大阪事件への参加は“国のために心を尽くした益荒男の行為で、その真心は私たちの道しるべとなるものだ”と賞賛している。ここには、民権、あるいは立憲制実現のための反政府的な革命運動や朝鮮開花派への支援行動が、何のてら

²⁶ 色川大吉『流転の民権家』大和書房、1980 年、56 頁。

²⁷ 佐藤孝太郎『三多摩の壮士』武蔵書房、1973 年、13 頁。

いもなく肯定されているのである。²⁸

最高指導者であった石坂昌孝もこの大阪事件に関与した三多摩壮士たちを賞賛していたのだ。トップが賞賛していたことから、恐らく、大阪事件に関わっていなかった三多摩壮士たちも彼らの行動に対して、多くが肯定的であったであろう。石坂昌孝は「暴徒化していった彼らの真心は三多摩壮士の道しるべ」と歌うくらい、彼らの真心を賞賛したことから、彼らも紛れもない三多摩壮士であるといえる。むしろ、政府に対してどんなことをしてまで自も分の信念を貫く彼らの真心こそが三多摩壮士の象徴である。

第4節 石坂昌孝から読み取る三多摩壮士のナショナリズム

これまでの3節で石坂昌孝や三多摩壮士の組織である融貫社、大阪事件などから三多摩壮士の本質を探ってきた。

第1節では三多摩壮士の特徴を探り、三多摩壮士の多くが豪農層の中でも没落傾向にある小豪農であり、過去に県会議員などといった指導的地位にたったことのある人物と色川大吉氏の先行研究から判明した。第2節では三多摩壮士たちの組織である政治結社、融貫社や自治改進黨に触れ、違った考えを持つ三多摩壮士たちがどのようにして大同団結を果たしたのかを探ってきた。第3節では大阪事件に関与した三多摩壮士たちをピックアップし、彼らは三多摩壮士の象徴であるということを述べた。これらのことから最後に石坂昌孝から読み取った三多摩壮士のナショナリズムについて紐解いていきたい。

第1項 反政府的な感情による影響

石坂昌孝はなぜ、自由民権運動において「全財産を使い果たし、暴徒化した彼らを賞賛する歌を残すほど自由民権運動に精力を注いだのか？」ということである。第1節で記した通り、石坂昌孝は全財産を使い果たし、借金を背負うほど民権運動に精力を注いでいた。第3節では大阪事件に関与した三多摩壮士たちに対して、賞賛する歌を記していた。特にこの賞賛していた歌から、三多摩壮士の最高指導者であった石坂昌孝の中では立憲政体を成し遂げる思いとは別に反政府的な感情もあったのではないだろうか。三多摩の豪農民権家には剣術へのすさまじい執着心がある。これは単純に武士道精神の下降でなく農民の意識の古さというものでもなく、ながい圧制への反逆の感情が籠っていたのではないかと推測されている。石坂邸にも義父の昌吉の影響で道場があった。思想表現資料の少ない石坂昌孝ではあるが、もしかすると反政府的な感情もあったのかもしれない。

第2項 原町田という立地～絹の道の中継点～

石坂昌孝は原町田の豪農である。原町田は八王子と横浜のほぼ中間地点にあり、絹の道の中継点であったため商売が盛んに行われていた。そのため、西欧からの書物も多く伝わって来たのはあきらかだが、それらの情報を交換する機会も多くあったであろう。彼はそ

²⁸ 渡辺奨「石坂昌孝の生涯」多摩文化 1966年、P317

の中で構築していった反封建、反帝国主義的な性質を保ちながら国権回復などを取り入れたナショナリズムを意識し、広く民衆の力を結集していった。この様なナショナリズムが形成された要因の一つとして原町田という立地を挙げることができるかもしれない。

三多摩壮士の最高指導者であった彼は厳しい生活を強いられた農民層とも深い関わりがあり、自らが犠牲を買って出た経歴があることから彼らには深く信頼されていたであろう。この様なことに加え、彼の立場や類まれなる組織指導力もあり彼の思想が三多摩地方において大きく広まっていった。

第5章 結論

第1節 3人の豪農の相違点について

これまでの論述から3人の豪農について簡単な表にまとめてみたのが図表6-1である。

この3人の豪農の中でも、それぞれの立地によって経済的背景が異なり、持高も変わってくる。富澤家は、連光寺村（現：多摩市連光寺）に立地し、持高が73石を誇り、天然理心流の流派に所属していたため、近藤勇との交友関係を持っている。深沢家は深沢村（あきる野市深沢）に立地し、持高が10石余（村高：45石）あり、第3章でも触れているが生糸・絹織物有名であり、「絹の道」を使って輸出されていた。この「絹の道」の中間地点である石坂家の野津田村（町田市野津田村）は、商都として栄え西洋の物流が盛んに輸入・輸出された。石坂家は、持高127石（村高：822石）を持っていた村1番の豪農だったため、西洋の文化・思想に触れることができたと考える。富澤家の触れていた書物では、嚶鳴社憲法草案・民法論綱・法律原論に触れており、石坂家では、ベンサム立法論・中江兆民の書物に触れていた。深沢家と石坂家の共通点として西洋の書物に触れている。それは、「絹の道」が大きな影響になっている。西洋思想の中でも、天賦人權思想（すべての人間は生まれながらに自由かつ平等で幸福を追求する権利）に影響されたことが、自由民権運動に大きく関わったのだろう。富澤家が少々古いが、本居宣長・平田篤胤の書物に触れていた。本居宣長・平田篤胤は、共に国学者として有名な人物で、「国学の4大人（しうし）」と称されている。国学は、後に尊皇思想へと変化していく。富澤家は、書物から見ても武力によって支配するというような思想が伺える。石坂家と深沢家の交友関係の中で北村透谷の存在がある。北村透谷は、民権運動にも参加していたが、大阪事件の際同士から資金調達のために、強盗を強要されたため、民権運動から離れていった人物である。

以上のことから、3人の豪農がそれぞれ異なった環境と思想を持ち、自由民権運動への活動へと行動を起こしていったことがわかる。

図表 5-1 3人の豪農についての比較検討

	富澤家	深沢家	石坂家
所在地域	連光寺村 現:多摩市連光寺	深沢村 現:あきる野市深沢	野津田村 現:町田市野津田
持高	73石 山二町 (明治3年)	10石余り (明治5年)	127石 (明治2年)
主な交友関係	近藤勇 田中光顕	千葉卓三郎 北村透谷 利光鶴松	中島信行 村野常右衛門 吉野泰三 北村透谷・美那
自由民権運動へのコミット	神奈川県議会選挙の当選 国会の早期開設運動	五日市憲法の草案 私設図書館の開設	初代神奈川県会議長 政治結社融貫社設立 神奈川県下大同団結
触れていた書物	本居宣長 平田篤胤 (ひらたあつたね)	嚶鳴社憲法草案 民法論綱 法律原論	立法論(ベンサム) 中江兆民
経済的背景	稲作 松木売買 山林経営	村高: 45石(文久3年) 炭 黒八丈(絹織物)	村高: 822石(明治2年) 生糸 絹の道の中継地点 商都

第2節 政治思想面から見た豪農の経路

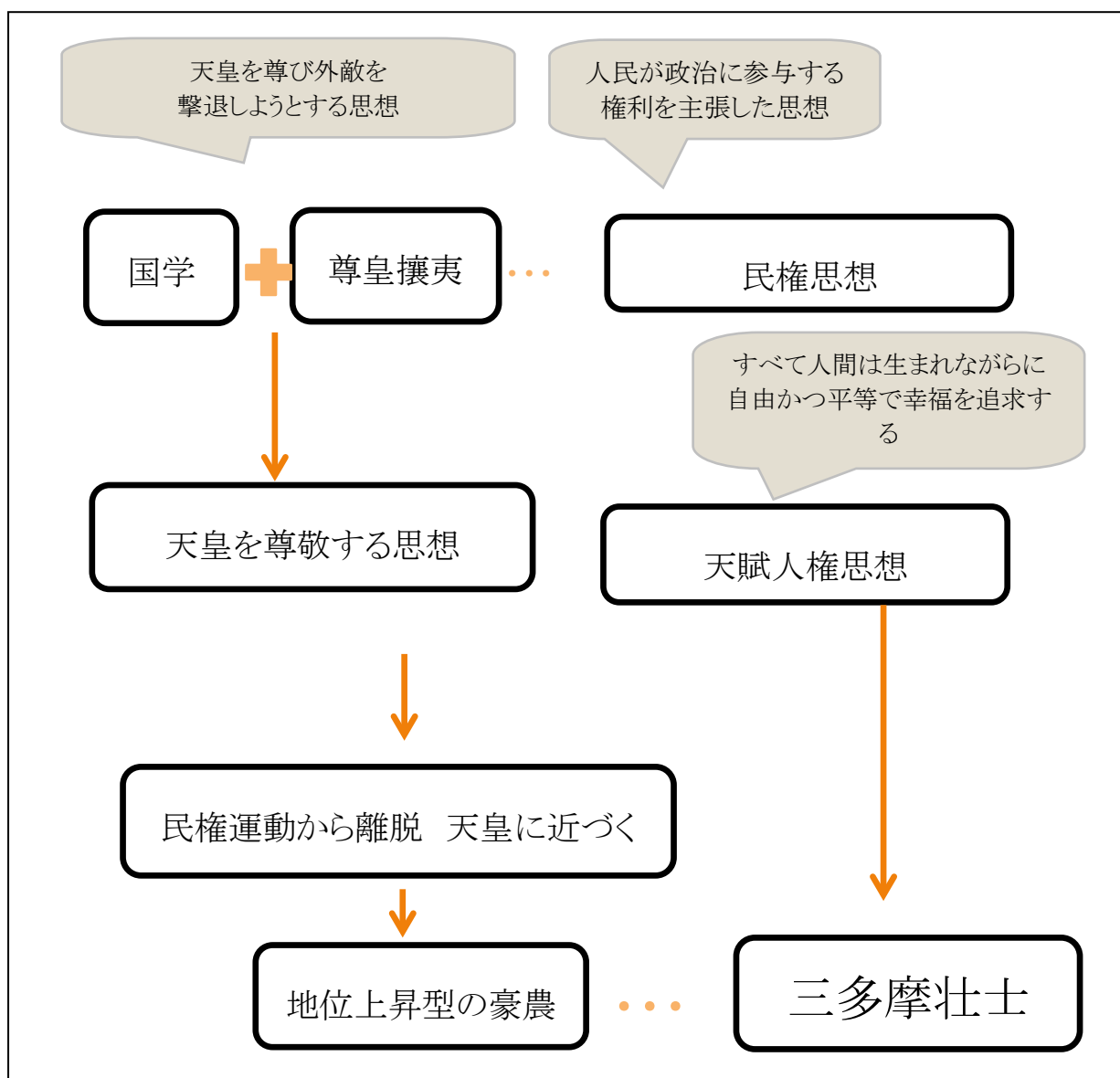
これまで、自由民権運動をめぐる富澤家、深沢家、石坂家という多摩の三豪農の動きを概観してきた。幕末期にはそれぞれが幕藩体制の中で地元の名主をつとめるという点で共通しており、身分的にはほとんど差がない豪農と見てよい。それが、自由民権期以降はそれぞれ異なる経路を歩むことになる。この差を、政治思想史面から説明するのが本節である。

幕末期から文明開化期にあって、深沢家、石坂家共に西洋思想に触れ、その民権思想に魅了されていく。ここでいう民権思想とはミルの自由主義やスペンサーの社会進化思想から、ルソーの天賦人権論までその差の吟味がなされたかどうかは不明ながらも、広く読まれていった。しかし、この段階で、富澤家はさほどこうした動きに興味を示していない。国学的教養に慣れ親しんでいた富澤は、むしろ王政復古による新政府に関心を抱き、その枠の中で自らの地位を向上させようと考えたのではないか。

日清戦争後の三国干渉で、民衆の中に「列強」に対する日本という形でナショナリズムが芽生え始める。民権運動の旗手で国民新聞を発行していた徳富蘇峰が、国権論に転向す

るいわゆる「蘇峰の変節」に象徴的に見られるように、自由民権運動にナショナリズムという問題が突きつけられたとき、民権を唱えていた人々はその行動を分裂させていった。一方は民権論をベースにした漸進的な自由主義を唱える豪農である。もう一方は、ナショナリズムをベースに反政府運動をしながらも、自らは自由民権運動の進化形と考えていた集団である。石坂などはまさにこのような一群であり、三多摩壮士と呼ばれる人々はこのような「ナショナリスティックな民権家」と呼ばれる一群だったのではないだろうか。

図表 5-2 豪農から三多摩壮士への経路



つまり、ナショナリズム、民権、自由主義という三つの思想の関連により、三豪農の経路が変化したと考えることも可能ではないか。そのようなことが起きる条件として、多摩地域が、何よりも三つの思想を先端的に受け止められる地勢であったことは見逃せない条件ではないだろうか。

第3節 社会経済面から見た豪農の経路

ここでは、本稿のテーマである「三多摩壮士はなぜ生まれたのか」について主に社会経済面から見た条件をまとめていきたい。前述したとおり、三多摩壮士が生まれた背景には、多摩地域に存在した豪農が大きな力を発揮した。しかし、全ての豪農が三多摩壮士の活動の中心的役割を担ったわけではないことも明らかである。それでは、どのような条件の下で豪農が三多摩壮士の中心的活動に入っていくのであろうか。

本稿では、前章までで考察した自由民権運動をめぐる富澤家、深沢家、石坂家という多摩の三豪農の動きからその条件の導出を試みる。すなわち、自由民権運動に大きな役割を果たしながらも三多摩壮士の中心的人物とはならなかった富澤家、深沢家に対し、石坂家は三多摩壮士の中心的人物となっていくのである。その相違点は何であったのか。各豪農の条件を整理、分析することによって、三多摩壮士が生まれた条件を導き出していこうとするものである。

第一に、海外からの自由民権思想の摂取を可能とする情報の入手可能性についてである。具体的には、ミルやスペンサー、ルソーなどの著書に加え、海外の政治情勢、民権運動の定性的な状況などを十分に入手できたかどうかである。自由民権運動を深みのある、または広がりのある運動へと昇華させていくためには、先進国である海外諸国の思想、状況を把握する必要があったと考えられる。

これには、それぞれの豪農がテリトリとしていた地域の状況、いわば「豪農としての立地条件」が重要となる。すなわち、海外からの情報を摂取できる地域特性を有する場所に立地していたかどうかである。この点を三人の豪農についてみていくことにする。

まず、深沢家は、五日市という炭や絹織物の交易上の要点近くに立地し、貿易にも直接的・間接的に関わることのできる立地であった。こうしたことは、海外の思想、政治状況の摂取および把握を可能とした。事実、深沢家の蔵書から多数の西洋思想に関する書物が発見されている。

石坂家はどうかであろうか。石坂家の立地は原町田である。現在、原町田中央通りの道路脇に原町田誕生 400 年を記念して建立された「絹の道」碑がある。原町田は新編武蔵国風土記稿に「神奈川道」と記されているように、八王子と横浜のほぼ中間地点にあり、八王子をはじめ各地と横浜を結ぶ「絹の道」中継点としての役目を果たしてきた。原町田は、横浜が開港されると生糸をはじめ諸物資の集散地となり、二六の市（六斎市）という市が盛んに行われるなど商業地域を形成したのである。市とは人々が交流する場でもあり、商品の交換とともに、国内外のさまざまな情報が「交換」されたことは想像に難くない。

一方、富澤家はどうか。富澤家の立地は連光寺であり、鎌倉街道は近くにあるものの、海外との接触到役割を果たすルートが十分に確保されている立地とはいえない。富澤家は、西洋の思想に触れるというよりも、漢詩などの文化交流を通じて自由民権運動の輪郭を理解してきたのではないかといえよう。

第二に、ナショナリズム思想の摂取である。前述のように、三多摩壮士の活動は、自由民権思想とともに、ナショナリズム思想とも深く結びついたものである。自由民権思想とともに、ナショナリズム思想をどのように摂取し、消化していったのかが、三多摩壮士の活動へと結びつく大きな条件の一つであるといえよう。

この点について、まず深沢家からみていく。深沢名生は黒船のスケッチを残したとされる。これは、外的抑圧とともに国家権力への不信、抵抗へとつながるものであった。深沢家の支援によって起草された五日市憲法草案の特色は、人権の尊重とその具体的な規定にある。お上が臣民にこうするべしなどというのではなく、「私たち」が国家にこうすべしと命ずるものだ。その底流にあるものは国家権力への不信と、それへの抵抗の精神である。つまり、深沢家が意識したナショナリズムとは、もっぱら民主革命を志向したものであったと考えられる。富澤家は、聖蹟の地であることから天皇を中心とした尊皇攘夷を志向し、自由民権運動から離れていくことになる。深沢家や富澤家のナショナリズム思想の中には「大阪事件」にみられるような対外強行主義を含む民衆を巻き込むような三多摩壮士の活動への条件はみられない。

他方、石坂家は、唯一、基本的には反封建・反帝国主義の性質を保有しながらも、不平等条約の撤回などの国権回復や当時のアジア観や排外的国権主義も取り入れたナショナリズムを意識し、広く民衆の力を結集していくのであった。こうしたナショナリズムが自由民権運動と融合し、社会的対立を暴露もしくは解放し、大衆の自主的組織の成長を推し進め、その不満を国内国外の抑圧に対する戦いに転換したのである。

このように、三多摩壮士活動への経路の条件を、海外からの自由民権思想の摂取を可能とする情報の入手可能性、およびナショナリズム思想の摂取状況によって整理したとき、石坂家のみが三多摩壮士活動の中心的役割を担う条件が揃っていたといえるのである。

さらに石坂家を決定付けるのは、厳しい生活を強いられた農民層（いわゆる困民層）との深い結びつきである。豪農層と困民層との利害が一致して自由民権運動が発展した契機は松方デフレといわれている。松方デフレは、根本的に農民の生活権を脅かすものであり、豪農・貧農を問わず自生的発展を遂げようとする農民たちの権利が抑圧される限り、中小商品生産者の代表が多くを占める自由党と負債農民の多くによって構成される困民党とは利害が一致していたのである。石坂昌孝は松方デフレで75%の土地を失ったとされる。しかしその後、1882（明治15）年に集会条例によって地方結社への弾圧が強化され、全国的には運動の中心的役割を担っていた多くの豪農層が離脱していく中、石坂昌孝は融貫社の20余名を率いて自由党に入党するなど、院外団としての三多摩壮士としての活動を広げていく方向へと走っていくのである。事実、石坂昌孝は明治14年に横浜・西村喜三郎から

の借金 2 千円が返済できず、18 年には石坂恩孝名義の田 2 町 25 歩を取られるなど、自らも借金問題に苦しめられた当事者としての顔も持ち合わせており、豪農といいながらも、必ずしも上位層のみの立場に立てなかったのである。こうした石坂の立場と類まれなる組織指導力が三多摩壮士の活動につながっていったものと考えられる。

第 4 節 自由民権、ナショナリズムの視座～現代に受け継がれる DNA と教訓～

私たちはここまで自由民権運動を通して研究を行ってきた。その中で、自由民権運動という民主化運動がひと段落着いてきた頃に日清戦争が勃発。日本国民は戦いに参加した。民主主義のために戦っていた最中に起こったこの戦争は私たちに本当の民主主義とは何かというものを考えさせた。この戦争の原因は民主主義では無くナショナリズムにある。愛国心が民主主義というものを超えたのだ。そこで最後にこの研究から健全なナショナリズムを考えていきたいと思う。私たちは健全なナショナリズムを平和な解決方法と捉え考察をしてみた。

まず、石坂だが彼は自分の財産を使いきってまで自由民権運動に精力を注いだ。そして困民層と呼ばれる人間の面倒を見るなど寛容な心を持つ人間であったということは前述までの文章を見ればわかるであろう。彼のように熱意と寛大な心を持って世界と向き合っていくことで、世界の理不尽な差別問題や領土問題の解決につながるのではないだろうか。次に、深沢家は土地の特性として外の文化を受けやすい環境にあった。これにより深沢家は海外の文化を受け入れていた。これは石坂のような考え方を多くの人が受け入れられる環境にしていくことで、石坂のような人間が出来るのではないだろうか。富澤家は自由民権運動から離れ確実に自らの地位を上げるために動いた人物である。彼に学べることは、時代における臨機応変な対応である。ときには自らリーダーとして立ち上がったり、これからの時代の担い手のために力を貸したり、ときには、自分が下につきそれで自らの地位を保った。ここから、世界各国でぶつかりあったときに武力抗争を起こさずして、最善の方法をその都度臨機応変に対応できるような柔軟な思考を持つということだ。

この考えを基に、昨今の日本とアジア諸国との領土問題も解決できるのではないだろうか。

健全なナショナリズムとはある種の完全なる民主化と愛国心のバランスが大切になるが、時代の流れと共にバランスを保てるようになってきている。民主化し、恒久平和が実現することで Win-Win の関係になるであろう。争いは憎しみしか生まない憎しみはまた新たな憎しみを生む。これの繰り返しにならないためにも健全なナショナリズムは必要なのではないだろうか

今後、世界に求められるのはこういった世界との向き合い方であり、それを受け入れる心である。グローバル化社会を生きるのであれば必須の考え方といえるのではないか。

補章 メディア史において自由民権運動により受けた影響と変貌

第1節 補章まえがき

自由民権運動を調べるにおいて、最も重要となるのが全国の国民が「自由」に対する関心が高くなったことが最も重要となる。

「三多摩の壮士がどのようなメディアを使い、どのようにして情報を活用したのか」という疑問が浮かび上がる。

自由民権運動時代にあたる1874（明治7）年～1890（明治23）年までの間に神奈川県内の結社は40を超えている。何故ここまで増加していったのか。それには「各個々人がそれぞれの媒体を利用し情報を集め、思想を作り上げていったのではないのか」という仮説に行きあたる。ではどのような媒体を使用していたのか。私たち現代社会に生きる人々は、多くの情報を「マスメディア」という媒体を利用して入手する。それは、自由民権運動時代の人々も変わらないであろう。また、この時代は鎖国時代を終え、西欧を中心とする当時の先進国との貿易を活発に行い、あらゆるものが流通する時代となった。多くの日本人はそれらを目にし、自分たちの国に導入し、現代の多くの「マスメディア」と呼ばれる媒体はこの自由民権運動時代に多く誕生し改良を遂げている。そして現代に生きる我々も多く活用している。そこで、本章では三多摩壮士の活動におけるメディアの役割について論じてゆく。それにより、自由民権運動にどのように影響を与えたのかを考えていきたい。

第2節 新聞・文学から見る自由民権運動 ～文字で伝えるメディア～

第1項 そもそもメディアとは

現在社会においても多くのマスメディアが存在している。古典的なイメージではテレビ、新聞、雑誌、ラジオなどいわゆる報道に関わる諸機関だが、そのほかに、映画、音楽、出版業界もここに含めることが多い。コミュニケーションのためのメディアはしばしば、いくつかの形態に分類される。マスメディアに媒介された情報伝達を、1点の発信源とし多数の点を到達点とする構造をなぞらせ、複数の送り手から複数の送り手へ情報が行き交うような仕組みを「ネットワークメディア」と呼ばれる。これは現在ではテレビやパソコン通信が代表的に挙げられるが、電話や郵便もここに加えることができる。

また、おもに使い手が情報を発信したり、記録、編集したりするために用いられているのを「パーソナルメディア」ということがある。これはマスメディアが情報の大量一括伝送であることと対比される。民権運動に活躍してきた人々もまたあらゆるマスメディアの媒体を駆使して情報をかき集めた。しかしそれらマスメディアは、いきなり現れたわけではない。彼らの活躍を裏で支え、思想の構築にも使われたマスメディアはどのように誕生し、どのように自由民権運動に携わったかを書き記すものである。

メディアとは情報の記録、伝達、保管などに用いられる物や装置のことである。「媒体」などと訳されることもあり、記録・保管のための媒体とコミュニケーションのための媒体

に大別することができるが、両者には重なりがある。例えばCD、手紙、電話、テレビなどは音楽、文章、声、映像などの情報を伝達するのに用いられるが、これらはコミュニケーションの媒体項として存在していることがおおい。情報がある人から別の人へ伝達される際には、そのあいだに何らかのメディアが介在している場合が多い。すなわち不特定多数の受け手を対象に情報を発信するような新聞、テレビ、ラジオなどを指す。それらは、特に報道の役割に注目している文脈で用いられることが多いため、これらを特に「マスメディア」と呼ぶ。

現在で言うCDや手紙のような様々な媒体一般を指してメディアと呼ぶ場合には技術、あるいは媒体そのものに注目している場合が多いが、報道利用に注目している文脈では、そうしたメディアの運営主体である報道諸機関（新聞社、放送局）を指している場合もある。

逆に非常に広義に捉える場合には、ある情報が送り手から受け手に届くまでに経由する媒介項すべてを指すことになる。それがどの程度広義であるかは、例えばテレビであるニュースキャスターが、主権についてニュースを読み上げる様子を、ある視聴者が見ている場合について考えてみるとわかりやすいだろう。ニュース原稿としてキャスターの手に書かれている言葉は、視聴者に届くまでには原稿を読むキャスターの視力は判断力、声や表情、空気の振動（音）や光の波長（色）、マイクロフォンやビデオカメラなどの撮影機材、編集機材、撮影機材や編集機材を操作する各種スタッフ、ケーブルや無線などの通信、テレビ局からの放送用の電波、テレビ受信機などの諸要素が少なくとも含まれている。またここで、ニュース原稿自体がやはりメディアの一種であり、ニュース原稿の書き手、言葉などを媒介として報道に対象である「事件」を伝えているものであると考えることもできる。実際に、報道研究やメディア論などではそのような観点からジャーナリストのもつ価値観や言葉について注目することも多く見られる。

いわゆる生放送ではない場合には記録、輸送、保管、再生などのプロセスがここに加わり、これらもメディアの一種ということになる。これは、音楽作品がどのように小数に作り手によって制作されて、多数の聞き手に届くか、ということ想定すればわかりやすいだろう。

では、1873（明治6）年から表面化された自由民権運動時代のなかではどのようなマスメディアがあったとされるのか。

第2項 文字で情報を伝える世界が誕生するまで

新聞とは事件、事故や政治や経済や芸能やスポーツや国際情勢などの動向などを報じるためのメディアであり記事文章や写真、図面などが紙（新聞紙）に印刷されるものを指すが、元々日本には現在の新聞と似たものとして瓦版が江戸時代以前から存在していた。それらは、木製のものが多く、天変地異や大火、心中などの時事性の高いニュースを、速報性をもって伝えた情報誌であった。それらも幕末期までは多く出版されており、街頭で読

み上げながら売り歩いていたため多くの人々が利用していたが、妖怪出現など、娯楽志向の事実とは異なる嘘の内容からなる情報も多く存在していたため、瓦版が衰退していった。

幕末の開国以来、居留外国人の間で英字新聞が発行され始めたものの日本人が作る日本語の新聞が発行されるには、少しの時間がある。それは、当時徳川幕府は出版物を厳重に、人々に必要のない他国からの情報規制を実施しており、また日本人には新聞の編集・発行のノウハウや活字印刷技術もまだ知られていなかったからである。しかし、徳川慶喜の大政奉還、王政復古とともに起きた戊辰戦争で、国が混乱し始めると全国から「今、自分たちの周りでは何に怒っているのか」を伝えるニュースを求める声が高まるようになった。戦争は、戦地近くに住むものの生活を脅かすとともに、社会を動かす諸行・経済にも大きな影響を与える。戦況をいち早く把握しておかなければ、自分たちの生活・生命を守れない。この切実なニーズにこたえる形で、明治元（1868）年に日本人が作る新聞が誕生することになる。

江戸鎖国時代の末期の幕末になると、イギリス人ジャーナリストのアルペート・W・ハンザード（Albert W. Hansard）は英字新聞として『ナガサキ・ SHIPPING・リスト・アンド・アドバタイザー』や『ジャパン・ヘラルド』などのタブロイド紙が1861（文久元）年に長崎の大浦居留地や横浜の居留地で発行されていた。それが日本において最古に発行された新聞である。それらの内容は各地の港に入港する船の情報が中心であり各国の領事館の官僚、広報の外国人向けの国内の巷のニュースや往来が盛んな上海などの他国の外信も掲載されていた。ハンザードは上海から輸入した輪転印刷機を導入することにより、大量で高速な印刷を可能にし、日本における近代活字印刷に多大なる影響を与えた。また彼の行動により日本の近代活字印刷進歩はなかったと言えるであろう。ハンザードは近代活字印刷の先駆者である本木昌造の門下生である平野富二（ひらのとみじ）や陽其二（みなみきじ）ら青年達に編集や制作、印刷の協力を求めた。翌年には、ジャワで発行されていたオランダ語の新聞『ヤパニッシュ・クーランド』を幕府の蕃書調所が和訳した初の日本語の新聞『官板バタビヤ新聞』が刊行される。また、明治初期になると、文明開化の流れに乗り西欧・欧米諸国を真似て作られた「新聞」が多数創刊されたことにより次第に真似ものの新聞ではなくなり自由民権期には、新聞・雑誌などのメディアが連動と絡み合いながら生まれてきた。平野富二は東京で活字販売に成功するという快挙を成し遂げる。武相地域でもハンザードの新聞作りに参加した陽其二は、後に1870（明治3）年には日本初の日刊新聞『横浜毎日新聞』や『武蔵野叢誌』などが創刊され、新聞・雑誌が発信する情報に触れた人々は、同じ「読者」として、情報や価値観を共有することとなる。地域リーダーとその子弟、教師などは地域社会における新聞・雑誌の主要な読者でもあったことはもちろん、しばしばその編集・発行・流通や内容の普及に携わり、投書などの手段によって、自らの主張を紙誌面に繁栄させたりしている。また新聞・雑誌などのメディアは、集団の意思統一をはかることや、集団の意思を外部に対して表明するうえで効果的であったことから、言論を武器とする自由民権運動の有効な道具としても、積極的に活用された。

明治政府においても、新聞の普及が国民の啓蒙に役立つという認識から、日本各地に無料の新聞縦覧所や新聞を読み聞かせる新聞解話会の設置をしたほか、新聞を公費で買い上げたり郵便で優遇したりして新聞社を支援するなどの新聞を積極的に保護する政策をとるなどしていることから明治政府においても新聞の情報の早さを重要視していたことは明らかであろう。こうした中、自由民権運動の広がりにもメディアの力が多いに活用された。当時、東京には都市に居を構え新聞、雑誌、演説会を言論の武器として活用していた井田文三をはじめとする民権派ジャーナリストが多く存在した。彼らの多くは、弁護士、新聞記者、教員といった自由業的性格を持ち、言論機関を背景に反政府的論陣を張り、演説行動を主体に地域啓蒙に専念する。

こうした民権派ジャーナリストの系譜として嚶鳴社、共存同衆会、交詢社、国友社、北辰社などが挙げられる。これら組織は、言論団体として独自にしかも東日本を中心に『それぞれ性格を持って演説活動、討論会などに積極的な啓蒙運動を展開していた。

そうした中でも、東京に本社を置き1877（明治10）年ごろから活発な啓蒙活動を行っていた民権派ジャーナリストの代表的な演説団体、東京嚶鳴社の活躍は目立っていた。嚶鳴社は民衆の政治意識の昂揚を図って沼間守一やその同志たちが、東京に開いた法律講義会がその起源である。

第3項 波乱の中にいた文学者達の自由への想い

明治維新をきっかけに近代日本は始まりを迎えたといわれている。鎖国時代から一気に文明開化の新しい状況に突き出された日本は社会全体が大きな戸惑いの中にあっただけでなく、渦中であって全体が見渡せる舵取り役は西洋学出身者である。その中でも福沢諭吉など明六社の人々であった。

特に福沢の知識は実学として広範な分野にわたっており、『西洋事情』は日本人の眼で、西洋を観察し紹介した最初の著者として大きな寄与を与えていた。彼の名を世間に知らしめたのは『学問のすゝめ』である。彼の平易な学問論、社会論によって「国の独立」と「文明」の関係を捉え、その平易な文章と相対主義的思考や発想は人々を魅了していた。

明六社は明治6（1873）年に結成され、翌年機関誌『明六雑誌』を刊行し、人々の啓蒙活動に有力な核の役目を果たした。その時代は、「文学者にとっての飢饉年」であった。読者層を形成していた旧幕府や御殿女中は、生活問題に迫られて身の振り方に迷っている「混乱時代」で小説を読むゆとりを失っていた。しかしその中で機敏に状況を把握し際物師ぶりを発揮した作者として仮名垣魯文が挙げられるだろう。2年間の沈黙の後に『万国航海西洋道中膝栗毛』を世に問いた。西洋体験もなく外国語も出来なかった魯文が精一杯「風俗」として西洋をとらえるべく、言葉の氾濫の繰り広げる姿はエネルギーを感じることが出来る。明治4年に発表する『安愚楽鍋』は開化風俗の一つ、牛鍋屋を舞台にし、そこに出入りする様々の階層の庶民の姿が描かれている様に人々は虜になった。

新時代への対応に腐心していた文学者達を巻き込んだのは政府の施策だった。明治5年教部省は敬神愛国、天理人道、皇上奉載・朝旨普及の「三条の教憲」を発令し、趣旨普及の教導職を任命した。戯作者側からは仮名垣魯文、山山亭有人の連名で「著作道の書き上げ」という文書が作られ、提出された。その後、魯文は2、3の実用訓蒙書を出版した後、神奈川県庁の雇員、「横浜毎日新聞」の雑報記者などに転じている。又多くの戯作者らが「著作道の書き上げ」以降に生活態度に変化が見られ、次々に新聞や雑誌の記者へと転じた。そこには「虚」から「実」への実録物の流行が伺える。明治7年ごろから、政治を論じる紙幅の広い「大新聞」に対して、やや狭い「読売」「平仮名絵入」などの「小新聞」が出るようになった。そこに載せられる読み切りの雑報は、読者の興味を繋ぐために、次第に連載の読み物に変化していった。「仮名読新聞」で連載された久保田彦作の『鳥追お松の伝』は大好評を巻き起こし、『鳥追阿松海上新話』と改題され、合巻装で出版された。刺激を受けた魯文は『高橋阿伝夜刃譚』を世に送った。

明治10年ごろになり、イソップ物語やアラビアンナイトの翻訳が登場し始め、川島忠之助訳ヴェルヌ作『新説八十日間世界一周』などが出版され始める。ヴェルヌやリットンの翻訳本は出版されていく。しかし、自由民権運動の進展とともに翻訳の方向でも変化がみられ、デューゴやデュマなどの政治小説的が提供されるようになった。

近代国家の発展が、西洋の社会をモデルにする限り、民選議員の要求が起こるのは必然であった。新しい座標軸の追求と現実を願って、自由民権への運動に火がつけられ、運動の展開に即応し、新しい文学として政治小説が登場した。政治思想を有効に宣伝するための手段の文学であった。本来ならば人間として当然の熱い要求に基づく運動であることに新しい契機が潜んでいたのである。

政治小説の最初の作品は明治13年刊行の戸田欽堂の『民権演義 情海波瀾』であると言われるが、やがて政府との対立が激化するにつれて、政治思想を宣伝する武器として盛んになり、自由党系では「自由新聞」「絵入自由新聞」「自由燈」、改進黨系では「郵便報知新聞」「改進黨新聞」などで作品の発表の「場」として新聞が大いに活用されるようになる。またこの時期にはフランス革命を題材にした桜田百衛訳デュマ作『仏国革命起源 西洋血潮小爆風』や宮崎夢柳訳デュマ作『仏蘭西革命記 自由乃凱歌』が世に送り出されていった。

しかし、今日の政治小説の代表的作品として知られるのは、矢野竜溪の『斉名武士 経国美談』や東海散士の『佳人之奇遇』だろう。ともに改進黨に属し、それぞれ民権を発揚、鼓舞する内容となっている。しかし、政治小説の命運は、自由民権運動の象徴と同じカーブを描いたことを言わねばならない。運動の敗北と国会開設の期待とともに本来の攻撃的な姿勢は丸みを帯びて行く。その姿は、末広鉄腸の『雪中梅』などを見れば明らかだろう。自由民権運動に対処しながら政府は明治14年の政変以降、10年間国会開設にむけて着々と諸制度の近代化に図っている。「革命」ではなく「改良」の次元において整備を推進することには政府の戦略があったと言っていいだろう。そしてこの「改良」は、文化や風俗だけに留まらず文学にも及んだ。それは、坪内逍遙の『小説神髓』で浮き彫りとなる。

第4項 文学の形成と交流

明治20年は憲法の発布、国家開設に象徴されるように、近代国家としての制度が確立していった時代である。この世代の人々によって「女学雑誌」「国民之友」「都の花」「早稲田文学」などの雑誌が創刊され、活動の「場」が広がったことで、更なる文学状況の形成や進展を実質的に支えていたことは二葉亭四迷の『小説総論』や『浮雲』の諷刺小説的設定作りは、画期的な新しさを備え、言文一致体の原点となる。後に『あひびき』、『めぐりあひ』などで一層洗練されたものとなり、若い文学志望の人々や多くの知識層を感動させ後の思想に影響を与えた。

そんな二葉亭と坪内が出会うことで、文学史だけに留まらず日本の歴史を大きく変えたことは事実であろう。それは硯友社の結成である。硯友社の方針である写実主義的文章は当時の時代ではセンセーショナルで評判を呼び、後の文学に大きな影響を与えた。その影響は次第に、既存の価値や座標軸の吟味を要求する清新な声に変化していった。それにいち早く応えた人物が森鷗外である。彼は自由な西欧の空気を体感したことで、西洋の文化を「自由と美の認識」に基づくという理解をもとに、規範とすべきものを掲示し、それによって啓蒙活動を戦闘的に進めるべきと説いた。それは彼の作品『於母影』や『舞姫』、『うたかた記』、『文づかひ』からも伺える。

20年代の文壇を硯友社がリードしているならば、論壇の最大勢力は徳富蘇峰が主となる民友社である。徳富は「国民之友」について「国民新聞」を刊行し、時代のオピニオンリーダーとして活躍した。多くの作家の批判を誘い、大論争に発展している。「文明開化」以来の欧米主義の流れに対して、断固として批判的立場を主張し国粹主義を勃興するのも同時期である。

日本の近代文学は小刻みに世代交代を繰り返しつつ、時代の文学を形成していったが、それはまさしく明治20年代で著しく現れている。明治時代を「移動の時代」として批判的にとらえたのは北村透谷である。自由民権運動を経験し、熱烈な恋愛に導かれてキリスト教に入信し西洋の近代思想や文学に触れて確立させた。『楚囚之詩』や『厭世詩家と女性』『頼襄を論ず』などをきっかけに、その功利主義的な文学観を發揮した。そんな彼を中心に島崎藤村、星野天知、戸川秋骨らによって「文学界」を創設した。

しかし、明治維新以後の近代国家形成の道を突き進んだ自由民権運動時代に対応する文字の営みは、まさしく自由民権運動時代に反映した模索と試みの展開の時代であったと言える。いち早く北村透谷が「移動の時代」であることを示唆しているように、国内の動きの流れによって次々と新しい思潮と方法が受け入れられ、摂取と適応の苦悩を通して時代の文学は形成されたといっても過言ではないだろう。

図表 6-1 自由民権運動時代の文学史年表

年代	社会	文学
慶応3年 明治元年 (1868年)	戊辰戦争 1月鳥羽伏見の戦い 3月西郷隆盛・勝安芳会見 4月江戸城会場 5月上野彰義隊 7月「江戸」から「明治」	
明治2年 (1869年)	5月五稜郭開城 6月版籍奉還	
明治3年 (1870年)		4月『横浜毎日新聞』創刊 9月 仮名垣魯文『万国航海西洋道中膝栗毛』（～9年、万笈閣） 『西国立志編』（～4年、静岡同人社、スマイルス著、中村正直訳）
明治4年 (1871年)	5月廃藩置県 10月岩倉具視ら、欧米視察	4月 仮名垣魯文『牛店雑談 安愚楽鍋』（～5年、静岡同人社） ※戯作流行 ※新聞・雑誌の創刊相次ぐ
明治5年 (1872年)	8月学生頒布 9月新橋-横浜間鉄道開通 11月太陽暦採用 徴兵令	2月 福沢諭吉『学問のすゝめ』（～9年、慶應義塾） 『自由之理』（同人社、J,Sミル著、中村正直訳） 2月 『東京日日新聞』創刊 6月 『郵便報知新聞』創刊
明治6年 (1873年)	7月地租改正	7月 森有礼ら「明六社」を結成。
明治7年 (1874年)	1月民選議員設立建白書提出	2月 成島柳北『柳橋新誌』第二篇（奎章閣、山城屋政吉） 3月 西周『百一新論』（山本覚馬） 4月 服部撫松『東京新繁昌記』（～9年、山城屋政吉、後篇14年、九春社） 9月 『朝野新聞』創刊 11月 『読売新聞』創刊
明治8年 (1875年)		4月 福沢諭吉『文明論之概略』（慶應義塾） 『平仮名絵入新聞』創刊 11月 『仮名読新聞』創刊
明治10年 (1877年)		12月久保田彦作『鳥追お松の伝』（～11年、『仮名読新聞』） 1月 『花月新誌』創刊 3月 『団団珍聞』創刊 12月 『大阪新報』創刊 ※狂詩狂文流行、新聞に続き物盛んになる
明治11年 (1878年)	5月大久保利通、暗殺 8月竹橋の近衛砲兵隊反乱	1月久保田彦作『鳥追阿松海上新話』（錦栄堂） 6月 ヴェルヌ作『新説 八十日間世界一周』（後篇13年、慶應義塾、川島忠之助訳） 10月 リットン作『欧州奇事 花柳春話』（～12年、坂上半七、織田純一郎訳） ※翻訳文学・毒婦物盛ん ※自由民権論起こる。
明治12年 (1879年)		1月 仮名垣魯文『高橋阿伝夜刃譚』（～4月、金松堂） 12月河竹黙阿弥『霜夜鐘十字辻笠』（『歌舞伎新報』） 1月 『大阪朝日新聞』創刊 2月 『歌舞伎新報』創刊
明治13年 (1880年)		6月戸田欽堂『民権演義 情海波瀾』（聚星館）
明治14年 (1881年)	7月 北海道開拓使払下げ 問題起こる 10月板垣退助「自由党」結成	10月河竹黙阿弥『島衛月白波』（新富座初演） ※自由民権運動高調
明治15年 (1882年)	3月 大隈重信ら、「立憲改進黨」結成	8月外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎『新体詩抄』（丸家善七） デュマ作『仏蘭西革命記 自由乃凱歌』（絵入自由新聞社、宮崎夢柳訳） 10月ルソー作『民約訳解』（仏学塾出版局、中江兆民訳） 12月デュマ作『仏国革命起源 西洋血潮小爆風』（絵入自由新聞社、桜田百衛訳） 3月 『時事新報』創刊 6月 『自由新聞』創刊 9月 『絵入自由新聞』創刊
明治16年 (1883年)	7月 鹿鳴館完成	3月矢野龍溪『齊武名士 経国美談』（後篇17年、報知社） 7月坂崎紫瀾『仏国革命 修羅の衝』（「自由新聞」） 1月 『絵入朝野新聞』創刊

		※政治小説流行
明治17年 (1884年)		5月 シェークスピア作『該撒奇談 自由太刀余波鋭鋒』（東洋館、坪内逍遙訳） 7月 三遊亭円朝『怪談牡丹燈籠』（文久2年作、口演速記、東京稗史出版社） 12月 ステブニャック作『虚無党実伝記 鬼啾啾』（～18年『自由燈』、宮崎夢柳訳） 5月 『自由燈』創刊
明治18年 (1885年)	11月 大阪事件 12月 内閣制度確立	1月 三遊亭円朝『塩原多助一代記』（速記法研究会） 6月 坪内逍遙『一読三歎 当世書正気質』（～19年、晚青堂） 9月 『小説神髓』（～19年、松月堂） 10月 東海散士『佳人之奇遇』（～30年10月、紫氏蔵版、博文堂） 2月 尾崎紅葉、硯友社結成 5月 『我楽多文庫』創刊 7月 『女学雑誌』創刊
明治19年 (1886年)	10月 ノルマントン号事件・条約改正	4月 二葉亭四迷『小説総論』（「中央学術雑誌」） 6月 須藤南翠『』（～8月、『改新新聞』） 8月 末松鉄腸『政治小説 雪中梅』（下篇、11月、博文堂） 末松謙澄『演劇改良会』 ※演劇改良論高まる
明治20年 (1887年)	12月 保安条例公布	4月 末松鉄腸『政事小説 花間』（下篇、21年、金港堂） 5月 中江兆民『三酔人経論問答』（集成社） 6月 広津柳浪『女子参政 屋中楼』（～8月、『東京絵入』） 二葉亭四迷『浮雲』（第二篇、21年、金港堂第三篇、22年『都の花』、24年、金港堂） 11月 山田美妙『武蔵野』（～12月、『読売』） 2月 徳富蘇峰『民友社』結成、機関誌『国民之友』創刊 7月 『以良都女』創刊 8月 『反省会雑誌』創刊 ※和歌改良論盛んとなる
明治21年 (1888年)		7月 ツルゲネフ作『あひゝき』（～8月、『国民之友』、二葉亭四迷訳） 8月 山田美妙『夏木立』（金港堂） 10月 ツルゲネフ作『めぐりあひ』（～22年、『都の花』、二葉亭四迷訳） 4月 三宅雪嶺ら「政教社」を結成、「日本人」創刊 7月 「東京毎日新聞」創刊 10月 「都の花」創刊 11月 「大阪毎日新聞」創刊 ※国粹主義が起きる。古典再評価高まる。
明治22年 (1889年)	2月 「大日本帝国憲法」発布 7月 東海道線開通	1月 山田美妙『蝴蝶』（『国民之友』） 2月 幸田露伴『露団々』（～8月、「都の花」） 4月 北村透谷『楚囚之詩』（春祥堂） 尾崎紅葉『二人比丘尼 色懺悔』（新著百首一号、吉岡書籍店） 8月 森鷗外ら『於母影』（『国民之友』） 9月 幸田露伴『風流伝』（新著百首五号） 10月 広津柳浪『残菊』（新著百首六号） 1月 「新小説」創刊 2月 「日本」創刊 10月 「しがらみ草紙」創刊 11月 歌舞伎座開場 12月 角藤定憲「大日本壮士改良演劇会」結成 ※活歴物盛んになる。新文学の動き高まる。
明治23年 (1890年)	7月 第一回衆議院議員選挙 10月 「教育勅語」発布	1月 幸田露伴『対鬪體』（初出『緑外縁』「日本之文華」） 森鷗外『舞姫』（『国民之友』） 3月 石橋忍月『想実論』（『江湖新聞』） 6月 宮崎湖処子『帰省』（民友社） 7月 尾崎紅葉『伽羅枕』（～9月、「読売」） 8月 森鷗外『うたかたの記』（「しがらみ草紙」） 2月 「国民新聞」創刊 11月 「国会」創刊
明治24年 (1891年)	5月 大津事件	1月 巖谷小波『こがね丸』（少年文学業書一篇、博文堂） 2月 森鷗外『文づかひ』（新著百首十二号、吉岡書籍店） 幸田露伴『風流艶魔伝』（「しがらみ草紙」） 3月 三宅雪嶺『真善美日本人』（政教社） 5月 北村透谷『蓬萊曲』（養真堂） 7月 斎藤緑雨『かくれんぼ』（春陽堂） 10月 坪内逍遙『シェークスピア脚本評註緒言』（「早稲田文学」）

		<p>11月幸田露伴『五重塔』（25年、「国会」） 12月森鷗外『早稲田大学の没理想』（「しがらみ草紙」）</p> <p>2月 川上音二郎、書生芝居を結成 10月「早稲田文学」創刊 11月伊井蓉峰、男女合同改良演劇済美術館 ※文学総論盛んになる。</p>
明治25年 (1892年)		<p>2月 北村透谷『厭世詩家と女性』（「女学雑誌」） 3月 尾崎紅葉『三人妻』（～11月、「読売」） 6月 正岡子規『癩祭書屋俳話』（～10月、「日本」） 11月アンデルセン作『即興詩人』（～27年、「しがらみ草紙」、30～34年「めさまし草」）</p> <p>11月「万朝報」創刊</p>
明治26年 (1893年)		<p>1月 山路愛山『頼襄を論ず』（「国民之友」） 2月 北村透谷『人生に相渉るとは何の謂うぞ』（「文学界」） 内村鑑三『基督教徒の慰め』（警醒社） 5月 北村透谷『内部生命論』（「文学界」）</p> <p>1月「文学界」創刊 2月落合直文「浅香社」結成</p>
明治27年 (1894年)	日清戦争（7月朝鮮出兵）	<p>5月 与謝野鉄幹『亡国の音』（「二六新報」） 10月 志賀重昂『日本風景論』（政教社） 11月 泉鏡花『義血侠血』（「読売」） 坪内逍遥『桐一葉』（～28年、「早稲田文学」） 12月樋口一葉『大つごもり』（「文学界」）</p> <p>5月帝国文庫『西鶴集』発禁。北村透谷自殺</p>
明治28年 (1895年)	4月 独仏露による三国干渉	<p>1月 樋口一葉『たけくらべ』（～29年、「文学界」） 2月 川上眉山『書記官』（「太陽」） 広津柳浪『変目伝』（～3月、「読売」） 4月 泉鏡花『夜行巡査』（「文芸倶楽部」） 6月 同『外科室』（「文芸倶楽部」） 12月 樋口一葉『十三夜（「文芸倶楽部」）』</p> <p>1月 「太陽」「帝国文学」「文芸倶楽部」創刊 ※日清戦争論盛んになる。観念小説、悲劇小説流行。正岡子規「日本」派隆盛。</p>
明治29年 (1896年)		<p>2月 尾崎紅葉『多情多恨』（～6月、後篇9～12月、「読売」） 3月 森鷗外・幸田露伴・斎藤緑雨『三人冗談』（～7月、「めさまし草」） 7月 与謝野鉄幹『東西南北』（明治書院） 広津柳浪『今戸心中』（「文芸倶楽部」） 9月 同『河内屋』（「新小説」） 10月 泉鏡花『照葉狂言』（～12月、「読売」）</p> <p>1月「めさまし草」創刊</p>
明治30年 (1897年)	3月 足尾銅山鉱毒問題が起きる	<p>1月 尾崎紅葉『金色夜叉』（～35年、「読売」、36年、「新小説」） 4月 宮崎湖処子・国木田独歩『抒情詩』（民友社） 5月 高山樗牛『日本主義を賛す』（「太陽」） 8月 島村藤村『若菜集』（春陽堂） 国木田独歩『源叔父』（「文芸倶楽部」） 9月 坪内逍遥『杓手鳥孤城落月』（「文芸倶楽部」）</p> <p>1月「ホトトギス」創刊 4月「新著月間」創刊 ※ナショナリズムの気運高まる</p>
明治31年 (1898年)	この頃から東京・錦輝館、横浜・港座、大阪・南地演芸場で活動写真上映	<p>1月 国木田独歩『武蔵野』（初出『今の武蔵野』、「国民之友」） 2月 正岡子規『歌よみに与ふる書』（～3月、「日本」） 3月 内田不知庵『くれの廿八日』（「新著月刊」） 4月 国木田独歩『忘れえぬ人々』（「国民之友」） 7月 福沢諭吉『福翁自伝』（～32年、「時事」） 11月徳富蘆花『不如帰』（～32年、「国民新聞」）</p> <p>2月「心の華」創刊 7月岡倉天心、日本美術院創立、 10月「ホトトギス」東京で創刊。 ※社会小説が起こる。</p>
明治32年 (1899年)		<p>3月 田崎嶺雲『嶺雲揺曳』 4月 土井晩翠『天地有情』（博文館） 横山源之助『日本之下層社会』（教文堂） 9月 菊池幽芳『己が罪』（～10月、後篇33年、「大阪毎日新聞」） 11月薄田泣菫『暮笛集』（金尾文淵堂）</p>

		<p>1月「反省会雑誌」を「中央公論」と改題発行。 3月「根岸短歌会」成立 11月与謝野鉄幹「東京新詩社」設立 ※家庭小説が盛んになる。 ※写生文起こる。</p>
明治33年 (1900年)	9月 立憲政友会発足	<p>2月 泉鏡花『高野聖』（「新小説」） 3月 徳富蘆花『思出の記』（～34年、「国民新聞」） 8月 同『自然と人生』（民友社） 小杉天外『はつ姿』（春陽堂）</p> <p>1月「歌舞伎」創刊 4月「明星」創刊 ※浪漫主義の気運高まる</p>
明治34年 (1901年)	12月 田中正造、足尾鉍毒問題を天皇に直訴	<p>4月 幸徳秋水『廿世紀之怪物 帝国主義』（警醒社） 5月 正岡子規・高浜虚子・河東碧梧桐共選『春夏秋冬』（～36年、俳書堂） 6月 登張竹風『フリードリッヒ・ニイチェを論ず』（「帝国文学」） 8月 島村藤村『落梅集』（春陽堂） 与謝野晶子『みだれ髪』（東京新詩社、伊藤文友館） 高山樗牛『美的生活を論ず』（「太陽」） 11月 国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』（「小天地」）</p> <p>※浪漫主義の詩歌盛ん ※ニーチェ主義流行</p>
明治35年 (1902年)	1月 青森歩兵第五連隊、八甲田山中で遭難 日英同盟協定	<p>1月 徳富蘆花『黒潮』（～6月、「国民新聞」） 小杉天心『はやり唄』（春陽堂） 2月 岡倉天心『東洋の理想』（ロンドン、ジョンマレー書店） 5月 田山花袋『重右衛門の最後』（新声社） 6月 内田魯庵『社会百面相』（博文堂） 9月 永井荷風『地獄の花』（金港堂） 12月 国木田独歩『運命論者』（「山比古」）</p> <p>2月「芸苑」創刊 5月「山比古」創刊 8月「芸文」創刊 10月「芸文」から「万年艸」に改題</p>
明治36年 (1903年)		<p>2月 小杉天外『魔風恋風』（～9月、「読売」） 5月 蒲原有明『独絃哀歌』（白鳩社） 7月 幸徳秋水『社会主義神髓』（万朝報社、東京堂） 8月 児玉花外『社会主義詩集』（社会主義図書部） 9月 幸田露伴『天うつ波』（～37年、「読売」）</p> <p>5月 「龍土会」成立 6月 「馬酔木」創刊 11月 幸徳・堺ら「平民社」創設、「週刊平民新聞」</p>
明治37年 (1904年)		<p>1月 与謝野晶子『小扇』（金尾文淵堂） 木下尚江『火の柱』（～3月、「毎日新聞」） 2月 田山花袋『露骨なる描写』（「太陽」） 3月 国木田独歩『春の鳥』（「女学世界」） 9月 合本『藤村詩集』（春陽堂） 与謝野晶子『君死に給ふこと勿れ』（「明星」） 木下尚江『良人の自白』（～38年、「毎日新聞」）</p> <p>1月 「直言」創刊 5月 「新声」を「新潮」に改題。 ※社会主義小説登場、反戦・非戦論盛ん。 ※新派全盛期を迎える</p>

(資料) 竹盛天雄『明治文学アルバム 新潮日本文学アルバム別巻』新潮社、1986年より作成

第3節 画報・雑誌から見る自由民権運動～絵で届けるメディア～

第1項 目で見ることの大切さ

三多摩壮士の活動は、小規模な農民を含めた大規模な活動であり、文字を読んで理解する層への情報伝達だけでは発生し得なかった。このとき、多くの豪農層は教養として漢詩や和歌を楽しみ、他国の言語にも嗜む風潮にあったが、自由民権運動の活動に大いに役立った農民層にはどのようにして伝わっていったのか。そのときに力を発揮したのが、絵などを用いた画報などの創刊や絵巻などの活用であると考えられる。

元々日本には平安時代の絵巻物を起源とし、室町時代の奈良絵本、江戸時代の草双紙と絵画（イラストレーション）を主体とした書籍のうち、物語などテーマを設けて文章を付与し、歴史を読み聞かせることを目的とした書物が多く存在することから、幼児や児童だけではなく大人が読んでも読み応えのある読み物も多く存在する。

また、絵手本のことを指して絵本と呼んだ例もあることから、特に江戸時代から明治時代にいたるまで存在していた赤本のなかで、中村惕斎による『訓蒙図彙』など教育的な要素の強いものとして挙げられる。明治時代になって欧米の印刷技術や絵本が入り、現在のような絵本の形態になってきた。

西欧のグラフィックやイラストレーション・マガジンの影響の元「画報」を名乗る雑誌が我が国に登場したのは、明治22年に創刊された「風俗画報」からであろう。

「風俗画報」に続くものとして「日本美術画報」、「戦国写真画報」（明治27年）「世事画報」（31年）「東洋画報」（36年）などの画報雑誌も創刊された。これらのなかで現代にまで存続しているのは「婦人画報」（38年）だけである。これらからわかることとして「画報」という新しいスタイルは現在に至るまで圧倒的な人気を得ているということがわかる。

出版元である東陽堂は「風俗画報」の前に美術専門誌「絵画業誌」と発行していた印刷・出版業で設立者は山形県米沢市出身の吾妻健三であった。16歳で上京し、苦学して大学南校に学び、教授ワグネツについて銅版印刷の技術を研究していた。後に独立して日本橋（中央区日本橋芳町2丁目）に東陽堂を開業したのは明治9年3月のことであった。後に神田区通新石町（現在千代田区神田須田町1丁目）、ついで駿河台袋町（現在の千代田区神田駿河台2丁目）に移転している。

「風俗画報」は明治・大正期の風俗雑誌で、東陽堂より1889年2月創刊され、1916年3月廃刊、通巻478号、号数外の増刊を含む総冊数は517冊という27年間という長期間刊行されている。西欧のグラフィック雑誌の影響を受け、はじめ主として石版画、のちに写真版が挿入された四六倍判の雑誌で、日本で初めて誌名に〈画報〉の文字が使われた。創刊号は28ページ、定価10銭だった。「風俗画報」が創刊された明治22年2月には、帝国憲法が発布された。鹿鳴館時代のピークとする欧化主義の風潮が、ようやく反抗期に入ろうとした時期である。明治20年創刊の「維新史料」、22年創刊の「江戸会雑誌」などとともに、画報

が民間に高まってきた。そのような機運に促されて誕生したことは、創刊号の「論説」に見られる。

「風俗画報」が編集方針として〈画ヲ以テテーノ私史ヲ編纂スルノ料ヲ作ル〉ことを定め、江戸時代風俗の考証、刊行時における東京新風俗の記録、全国に伝わる地方風俗の紹介の3分野に大別ができる。創刊当初は時流を反映しており刊号でも、「幕府年中行事」の再録、「現今婦人の髪容」の図解、屋代弘賢遺稿「諸図風俗問状」の解説などに、すでにその方針が伺われるが、創刊当初は時流を反映して、江戸風俗研究にもっともウェイトがかけられていた。

第二号(明治一二年三月)には、憲法発布式正殿式場之図、観兵式行幸図など八図を収めた「憲法発布式御次第 付観兵式及府下祝典の景況」といったトピックス、京阪神での見聞を記した北巖野史(野口勝一)による「関西風俗談」などとともに、高橋又太郎編「徳川時代江戸時代の変革」、乙羽庵主人「流行落書」、山下重民「門松考」、依田百川(学海)「畫師歌川貞秀が話」など、江戸風俗に関する文章が多い。このうち高橋又太郎、乙羽庵主人とあるのはいずれも渡部又太郎のうちの大橋乙羽であった。また、矢野竜溪「経国美談」(明治16年)東海散士「佳人之奇遇」(18~30年)、末広鉄腸「雪中梅」(19年)などの様々の分野を越え自由民運動だけに留まらず活躍していった。

その中で、矢野竜溪や東海散士の活躍が著しいだろう。

矢野竜溪(本名:文雄)は1871年(明治4年)に慶應義塾へ入門し、日本の憲法に疑問を抱き、英米の憲法史を研究。1874年に「商ニ告ル文」を『民間雑誌』に発表、『西洋偉人言行録』を出版。森田思軒や犬養木堂などと交際し、英米の政治制度を研究した。民権の伸張と立憲体制の樹立という志を立て、『報知新聞』に評論を送り始めたのもこの頃である。1879年に福澤諭吉の推薦で大蔵卿であった大隈重信のもとに大蔵省に入り、大蔵書記官、ついで会計検査局員として勤め、従六位に叙せられる。交詢社創設にも加わり、また1880年には小幡篤次郎らと私擬憲法を起草し、憲政の樹立を説いた三勢論は翌年大隈によって奏上された。1881年に大隈と計って『郵便報知新聞』を買収し、同年1月に『郵便報知新聞社』社長に就任。立憲改進黨の結成にも参画する。1882年に大隈重信の立憲改進黨に参加し、国民を鼓舞し憲政を立てさせるのに役立つような政治小説を作ることを決意し、古代ギリシアのテーベの興亡を題材として成立した『経国美談』の前篇が1883年に発表された。大評判となり版を重ね、特に前篇・第11回の「春の花」は運動が高潮しつつあった民権運動家達に愛唱され、また松林伯圓や川上音二郎が講談として演じた。帰国後は『郵便報知新聞』の改革を計り、購読料の引き下げ、記事の充実、文体の平易化、配達の敏速化を進め、弟の小栗貞雄や三木善八を起用した。1888年に新聞経営の第一線から一時身を引き、1889年には政界引退を発表、新聞用達會社(後の帝国通信社)設立する。社会主義にも関心を持ち、1901年に田川大吉郎らと社会問題研究会を設立。1902年には資本主義と社会主義の調和を説く、ユートピア小説とも言える『新社會』を発表する。1902年に国木田独歩を推薦して敬業社に入社させ、1903年に敬業社から改名した近事書報社顧問となり、

編集主任の国木田に助力、以後「出鱈目の記」など多くの論説を『近事書報』『婦人書報』誌などに掲載した。1904年の日露戦争開戦により誌名を『戦時書報』に改名。1906年には大阪毎日新聞相談役、後に監査役、副社長となり、小説「不必要」を『毎日電報』に連載した他、多くの随筆や政論を発表している。1926年に乗用車が京王線の電車と衝突し重傷を負う。1931年に豊多摩郡千駄ヶ谷町の自宅で死去、多磨墓地に葬られた。

東海散士は進歩党、憲政本党、立憲同志会、大同倶楽部に所属しており、少年期に会津藩士として戊辰戦争に従軍した後に東京で謹慎生活を送りつつ勉学を励むも学費の問題から国内を転々とする。1877（明治10）年に西南戦争に参加した際に熊本鎮台司令長官・谷干城に見いだされ27歳のときに岩崎家の援助を受けてペンシルベニア大学へ留学する。1885（明治18）年に帰国し、持論である「国権伸長」論を基調とするナショナリズム小説『佳人之奇遇』を出版する。彼の国粹主義的立場で、欧化政策を批判していることから、彼の考えが多く場面で見受けられる。

これらからわかることとして、文字の理解が乏しい多くの人々に対して自分の持論をより多くの人々に周知するために用いたのが「画報」であるということがわかる。上記2名の共通点としてあげられるのは、それぞれが薩長土肥にゆかりがあり、それぞれが国の要職に就任した後に政治小説やジャーナリストになるというところにある。その際に画報を使用し、自分らの主義主張を述べていると言う点でも似ているところにある。

しかし、上記の彼らの活躍を支える人物として大橋乙羽という存在は欠かせないだろう。大橋乙羽は1869（明治2）年山形県米沢市に生まれた。小学校卒業後山形市の呉服屋に奉公したが、文才、画才、に富むところから友人達と雑誌を作った。『出羽新聞』に寄せると帰省中であった東陽堂店主吾妻健三郎にその筆力が認められ、美術記者として『絵画叢誌』の編集に当たる。『風俗画報』には第三号（明治22年）には「徳川時代武家土木談」、第四号（同年5月）から「日本駅逦の沿革」、第十七号（23年6月）から「浅草の賑ひ」第十八号（同年7月）から「奥州旅日記」、第二十号（同年9月）に「唐太狗車」、第二十一号（同年10月）に「菽寺の記」を発表するなど、江戸研究、世相ルポルタージュ、旅行記といった多面的な執筆活動を続けている。また、石橋思案を通じてまた、硯友社の同人となり、小説「京屋の娘」（明治22年3月作）、「露小袖」（同年10月作）、「霜夜の虫」などによって作家としての地歩を築くなどその才能、人格についても「小説、随筆、紀行等は勿論関し、和歌、都々逸、端唄の末に至までそ文事に関するもの必ず試みざるがなく、同時に写真家、旅行家、美術家、として聞え、且つ善良なる交際家、篤実なる商業家として知らるゝものただにまれに見る奇才ならずや。……」と賞揚している。

以上述べてきた所によっても、『風俗画報』が果たした歴史的役割は大きかったのではないかと考えられる。学問的体系を欠いた好事家的な取り組みかたが目に付くとはいえ『風俗画報』に20年以上も掲載され続けていた全国の地方風俗の紹介が日本民族やジャーナリズム史への地ならし的役割をつとめたのであろう。また多くの人々に周知するために最も使われた媒体として『画報』が取り扱われていたことは確かである。

第4節 民謡・童謡・演歌から見る自由民権運動～音で届けるメディア～

第1項 民謡から伝わる言論の自由の現実

さらに運動を広めるためには、多彩なメディアが出現することになる。その一つ民謡・童謡・演歌と言った音で届けるメディアである。こうした民権運動の思想は、自由民権思想を鼓吹した演歌によって民衆の間に浸透していった。もともと演歌は自由党の壮士たちが、新しい流行歌として創作、街頭で読売して、それが大衆に受け入れられることになる。後年「おっぺけペー節」として一世を風靡するところとなる。

愉快節の作者である川上音二郎（1864～1911）は博多生まれの俳優で、おっぺけペー節を大阪の寄席で唄い人気を得る。1891（明治24）年書生芝居を組織して、のちの新派劇の基礎をつくった。妻の貞奴とともに欧米を巡業。東京に川上座、大阪に帝国座を建設して歌ったのが最初で、面白おかしく節を付け「おっぺけペ、おっぺけペっぽう、ペっぽっぽう」の囃子詞で結ぶもの。劇場のほか街頭でも盛んに歌われた。

また、NHK大河ドラマ「坂の上の雲」で愛媛・松山の秋山真之、正岡子規らが当時の若者が薩長藩閥政府への不満から自由民権運動にかぶれている様子が描かれていました。彼らが歌っていたのが「民権数え歌」である。

「民権数え歌」作：植木枝盛、1878（明治11）年

原詩は20番までである。土佐の政治結社「立志社」の遊説員が歌ったものとされている。

一ツトセー 人の上には人ぞなき 権利にかわりがないかわは コノ人じゃもの
二ツトセー 二つはない我が命 すてても自由のためならば コノいとやせぬ
三ツトセー 民権自由の世の中に まだ目がさめない人がいる コノあわれさよ
四ツトセー 世を開けゆくそのはやさ 親が子におしえられ コノかなしきよ
五ツトセー 五つにわかれし五大洲 中にも亜細亜は半開化 コノ悲しさよ
六ツトセー 昔をおもえば亜米利加の独立したのもむしろ旗 コノいさましや
七ツトセー なにゆえお前がかしこくて 私らなどは馬鹿である コノわかりやせぬ
八ツトセー 刃で人を殺すより 政事で殺すが憎らしい コノつみじゃぞえ
九ツトセー こころでもう目をさまさねば 朝寝はその身のためでない コノおささんせ
(以下略)

民権田舎歌（植木枝盛『民権自由論』付録 1879年＝明治12年4月刊）

自由なるぞや人間のからだ/頭の足も備わりて/心の靈妙万物/心と身とが俱はるは/ひとつの天地を云ふもよし/自分一人は一人で立つよ/何も不足はなひものぞいの/そこから人間を自由と申す/自由じゃ自由じゃ人間は自由/食ふも自由に生きるも自由/心は思ひ口は言

ひ/骸は動き足しや走る/視たり聞たり皆じゆう/自由にするのが我権利/自由の権利は誰もが持つ/権利張れよや国の人/自由は天の賜物じゃ/

この歌を1878（明治11）年に作ったのが植木枝盛。「土佐新聞」、「高知新聞」などの主筆として活躍した人物である。植木枝盛は弱冠20歳で坂本直寛、片岡健吉らとともに佐川町をはじめ高知県各地で政談演説会、懇親会、夜学会をして回っていた。また政論誌『海南新聞』では社説のような文章を、大衆紙『土陽雑誌』ではルビ付きの社会面記事のような文章を書いていた。明治維新时期では「政府と政府の交換、すなわち治者のみの関係であって（中略）人民の幸福がマジ丈ではない」だからこそ「政府の独裁を廃して、人民をして政権を掌握すべきだ」（「明治第2の改革」より）そして、民衆の心を掴んだ「よしや武士」「民権数え歌」「民権都々逸」「民権田舎歌」など創作する。

薩長の政府に反発する元武士であった士族の最後の大規模な武力反抗が、九州で起こった西郷隆盛がリーダーの西南戦争のときである。以後、士族たちは武力闘争から、政治闘争へ発展し、国会開設や憲法制定などを求め、民衆を巻き込んでゆく。その中心だったのが、土佐である。「自由は土佐の山間より」ということになる。ドラマの中でも、「自由民権運動の本場、土佐がとなりだから、愛媛でも運動が盛り上がっていた」という解説があった。当時の資料を集めたのが高知市にある自由民権資料館である。「日本の民主主義発祥の地」として、もっと高知県人は誇りを持つべきである。

このように、青年群像が自由民権運動をしきっている姿が現代の若者にも重なっていることから次の時代を拓く勇気は、青年たちにこそ似合うと感じる。植木枝盛は36歳の若さで亡くなっている。

第2項 演歌から伝わる変貌

このとき演歌も民謡とは違う形で発展を遂げている。明治時代の自由民権運動において政府批判を歌に託した演説歌の略である。「演歌」は「演説歌」の略語であり、明治時代自由民権運動の産物であった。藩閥政治への批判を歌に託した政治主張・宣伝の手段である。政治を風刺する歌（プロテストソング）で、演説に関する取り締まりが厳しくなっていく19世紀末に、演説代わりに歌を歌うようになったのが「演歌」の名称の始まりと言われる。当時は政府が廃藩置県、地租改正、学制、徴兵令、殖産興業などの政策を実行している最中で、自由民権運動も盛んな時代であり、「オッペケペ」で有名な川上音二郎らの壮士芝居を筆頭に「ゲンコツ節」などがある。ほかにも政治を風刺する歌はあったが、これ以後、「演歌」という名称が定着する。明治後半から、心情を主題にする社会風刺的な歌が演歌師によって歌われることにより、次第に演説代用から運学分野にシフトするようになった。

その頃に添田唾蟬坊と坂本龍之輔の存在は欠かすことが出来ないだろう。彼は、海軍兵学校を志願して上京したが、受験勉強中に浅草の小屋掛芝居をのぞいたのがきっかけで、その世界にのめり込む。海軍兵学校には入学せず、汽船の船客ボーイになり、2年で挫折。

以後、横須賀で土方人夫、石炭の積み込みなどの仕事に従事していたが、1890（明治23）年、壮士節と出会う。唾蟬坊は、最初の演歌といわれる「ダイナマイト節」を出した青年倶楽部からその歌本を取り寄せて売り歩いたが、のち政治的な興奮が冷めていくと、政治批判ではない純粋な演歌を目指して、自身が演歌の歌詞を書くようになる。唾蟬坊が最初に書いたといわれているものは、「壇ノ浦」（愉快節）、「白虎隊」（欣舞節）、「西洋熱」（愉快節）などで、1892年（明治25年）の作である。これ以降、「まっくろけ節」、「ノンキ節」、「ゲンコツ節」、「チャクライ節」、「新法界節」、「新トンヤレ節」と続く。1930（昭和5）年に「生活戦線異状あり」で引退するまでに182曲を残したという。この頃、友人と始めた「二六新報」がうまくいかず、茅ヶ崎に引っ込むが、「渋井のばあさん」と呼ばれていた知り合いの流し演歌師に頼まれてつくった「ラッパ節」が、1905年（明治38年）末から翌年にかけて大流行する。幸徳秋水・堺利彦らとも交流を持つ。こうしたことがきっかけで、堺利彦に依頼を受け、「ラッパ節」の改作である「社会党喇叭節」を作词。1906年（明治39年）には、日本社会党の結成とともにその評議員になるなどし、その演歌は、社会主義伝道のための手段になる。唾蟬坊が住んでいた下谷地区にあった貧民学校、下谷万年小学校の校長は坂本龍之輔で、のち添田知道はその小学校に入学し、彼に教えを受けた。知道の著『小説 教育者』は当時の教育体験を背景にしたもので、主人公は坂本であり、小説といいつつも、かなり史実に添ったものである。

第5節 歌舞伎・民俗芸能 ～身体で伝えるメディア～

第1項 時代に語り継がれ変化するメディア

明治時代でも歌舞伎は絶大な人気を誇るが、日本国外から劇場事情を知った知識人たちなどからはその内容が文明国には相応しくないものと批判の声もあがるようになった。歌舞伎では物語の背景や人物設定が決して簡単明瞭なものではなく、また内容も仇討ち、お家騒動、心中立などといった「前近代的」なものが多く、しかも盗賊・侠客・悪家老などを賛美するものであり、肩書きも荒唐無稽、そしてそれを宙乗りや早替わりなどといった外連の演出で補うなどというのは知識人が信じる西洋式の演劇の本来あるべき形をないがしろにするものである。という批判が噴出した。

様々な批判を受けて演劇改良運動と呼ばれる歌舞伎様式の改良運動が起こった。これは明治政府の文明国の上流、中流階級が鑑賞するに相応しい演劇の成立を目指す目論見とともに、政治家を巻き込んだ運動となった。この運動のひとつの成果として、現代につながる歌舞伎座の開場がある。また新派と呼ばれる日本の新しい演劇形式が成立した。

図表 6-2 演劇改良運動の主な動き

1872年（明治5年）	東京府庁から狂言綺語（荒唐無稽な創作話）をやめることなどが申し渡される。
1878年（明治10年）	西南戦争を題材にした実録物『西南雲晴朝東風』が記録的な大当たりとなる。
1879年（明治11年）	新富座が開場（ガス灯を配備したて夜間上演を可能にした初の洋式大劇場）。
1886年（明治19年）	末松謙澄、渋沢栄一、外山正一らが演劇改良会を結成。
1887年（明治20年）	外務大臣・井上馨邸に明治天皇を迎え、四日間にわたって天覧歌舞伎を催す。（これより先、1876年に天覧能が行われた）
1888年（明治21年）	『籠釣瓶花街酔醒』（三代目河竹新七作）初演。
1889年（明治22年）	歌舞伎座が開場。
1894年（明治27年）	日清戦争を実録風に描いた川上音二郎の戦争劇が評判になり、翌1895年、川上は歌舞伎座の舞台を踏む。

（資料）服部幸雄『歌舞伎の歴史』岩波書店、2008年より作成

明治時代に入って文明開化の世となり、西洋の演劇に関する情報も知られるようになると、歌舞伎の荒唐無稽な筋立てや、前近代的な習慣などを批判する声上がる。

1872（明治5）年になると歌舞伎関係者が東京府庁に招集され、貴人や諸外国人が見るに相応しい道徳的な筋書きにすること、作り話（狂言綺語）をやめることなどを申し渡された。鹿鳴館時代の1886（明治19）年の第1次伊藤内閣の意向もあり、末松謙澄、渋沢栄一、外山正一をはじめとした政治家、経済人、文学者らが演劇改良会を結成。そこでは、女形の廃止し、女優を出演させることや、花道の廃止、劇場の改良、芝居茶屋との関係の見直しなどを提言し、以下のような目標を掲げ歌舞伎の社会的地位の向上に勤しんだ。

- 一・従来演劇の陋習を改良し、好演劇を実際にださしむること。
- 二・演劇脚本の著作をして、荣誉ある業たらしむること。
- 三・構造完全にして、演劇その他音楽会、歌唱会の用に供すべき一演技場を構造すること。

また、翌年には、当時の外務大臣だった井上馨の邸宅にもうけた仮設舞台で明治天皇による天覧歌舞伎を実現させ、團十郎、尾上菊五郎、市川左團次をはじめとする当時の看板役者が一同に会し『歓進帳』などをつとめる。これによって歌舞伎の社会的地位は大いにあがった。

その頃、角藤定憲は“過激な自由民権運動は取り締められ”との命令に逆らって郵便配達を退職し中江兆民の自由党機関紙『東雲新聞』に入り、自伝小説を『剛胆の書生』を連載する。保安条例により大阪へ逐われていた兆民は、中村宗十郎の歌舞伎『雪中梅』を観て、自由民権運動の推進に演劇が有効と気づき、『剛胆の書生』の上演を角藤に勧めた。『日本改良演劇一座』と称し、自作の『耐忍之書生貞操佳人』と、幸徳秋水作の『勤王美談山野曙』とを、新町座で上演した。しろうと芝居だったが、もの珍しさが評判を呼び、板垣

退助にも激励された。後続の劇団が各地に生まれた。角藤は俳優に転じ、笠井栄次郎、池田吉之助、神原清三郎、横田金馬ら、十数人の座員と、翌年から京都・中国地方・九州を巡業した。『大日本壮士演劇会』、『大日本帝国元祖壮士演劇』などとも称していた。しかし1894年（明治27年）、東京で初公演したが、後続の川上音二郎、伊井蓉峰、福井茂兵衛、山口定雄らの数劇団がすでに根を下ろしていて、角藤一座は注目されず、もっぱら地方を回るようになった。彼らの新しい芝居は総称して「新演劇」と呼ばれ、歌舞伎の「旧派」と対比して「新派」と通称されるようになった。演劇といえば歌舞伎に限られ役者の一族ででもなければ役者になれない状況が一変し、素人でも役者になれる時代が到来した。数多くの俳優志願者が新派劇団に集まって来た。

第2項 多摩地域の民俗芸能とそれにおける自由民権運動のつながり

かつて、三多摩と呼ばれた地域のうち、山地の多い西多摩地方と南多摩地方は、元々山や農村がほとんどであったこの地方が鉄道の発達、貯水池、飛行場、軍事基地建設、宅地、ニュータウン造成、大学・研究機関の設置など急激な変貌を遂げている。また経済基盤もゆらいで、生活も一変した。しかし、奥多摩や山沿いの地域では、昔ながらの伝統芸能を守る地域も多く、また、移住者が占めるニュータウンを除いては、都心部でも祭りの賑わいの中に伝統芸能である歌舞や囃子を伝える風習がある。

多摩川の本流は山梨県側から旧小河内村へ流れ込むところに賀茂神社・御霊社の祭礼に奉納されていた鹿島踊が初期歌舞伎の姿を残すものとして、現在は奥多摩湖畔の小河内神社の祭礼に奉納されている。湖畔近くの川野には人形遣いが車に腰掛けて人形を操る車人形芝居があり、川野地区の箭筈神社祭礼に奉納する。

この人形遣いの師匠は八王子市恩方を本拠とする西川古柳の4代目で、初代が江戸時代末期に車人形を創設し、説経浄瑠璃にのせて人形芝居を演じて人気を博した。様々な工夫を凝らし国際舞台でも活躍していた。説経浄瑠璃は元禄のころに人形芝居とともに人気を得たが、その後義太夫などに押され衰退する。江戸中期に復活し薩摩太夫の代々が継承し、八王子地方に流布した。現在では薩摩派と若松派が存在し、前者は八王子。後者は板橋区を拠点としている。

小河内神社の祭礼には、近くの小留浦集落の花神楽も上演されている。花神楽は、里神楽や万歳、地狂言、獅子舞などの諸演目を集めたもので娯楽性に富むものである。同種の花神楽は、川を下った奥多摩町海沢の神庭にも伝えられている。また隣村の檜原村数馬にも花神楽と共通のものがあ、鎮守九頭龍神社の例大祭にも奉納される。大神楽は、江戸大神楽の伊勢派の流れを受け継ぐものであり、数馬をはじめ小留浦・神庭青梅市の二俣尾平溝天之社・同市柚木。同市梅郷上郷、さらにはあきる野市乙津に伝えられている。

修験の場として名高い青梅市御岳山の武蔵御嶽神社では、参詣の講中が奉納する太々神楽を神職は演じる。古伝の舞のほか、江戸系の里神楽の演目も存在している。里神楽は、江戸の里神楽として山本頼信家が古くから稲城市矢野口穴澤天神社などに奉仕し、さらに

西多摩から三鷹・中野の方面を上演地域としている。里神楽には江戸系以外にも相模地方を地盤にした職業神楽師による相模流の里神楽が存在し、多摩地方にも上演地域としていた。両者ともに農民相手に歌舞伎や面芝居などを演じ人々を魅了していたが、その中であきる野市二宮神社に奉仕した神楽師が明治中期以来、神楽と並んで歌舞伎を売り物にするようになっていった。その後衰退して栗沢一座のみになったが 1975 年地域住民の参加で二宮歌舞伎が誕生した。それは、年々発展していき、現在では秋川歌舞伎と呼ばれるまでに至った。

歌舞伎は明治時代から野天に回り舞台付きの仮設舞台を組み立てて演じたことは多々あったが、この舞台の組み立ての道具と組み立て技術を残す同市菅生では 2004 年に舞台造りと芝居両者の保存を目的とした菅生一座を結成した。

三匹獅子舞は多摩地域広域で分布されており、多摩川と秋川両水路に沿っている。一方、それぞれ形態は多少異なり、檜原村の南秋川に沿う笹野と北秋川に沿う小澤には、能の「式三番」の詞章と舞を摂りつつ、それを典雅に郷土芸能化した式三番が伝えられている。それは、いずれも神事芸能として風格を備えている。一方、平井川に沿う日の出村平井には、鳳凰の冠を被った青年 5 人が大太鼓を豪快に打ち鳴らし踊る舞と、奴姿の少年たちが道を練って出で輪になり、歌舞伎調のツラネを述べる芸の一連とした鳳凰の舞が伝承されている。多くは自由民権運動時代に発祥したものが多摩地域に流れ着き、現代の形にいたるものであると示唆できる。言論として規制がおおいなかで人々にどのように伝えるか、文学の一つとして人々に周知する事により、政府ももみ消す事が出来なくする手段であったと推測できる。

第 6 節 多摩地域の民権家の蔵書から見るメディアの重要性

第 1 節 貪欲な知識への探求心

幕末から明治期にかけて印刷技術の改良・発達が進んだことにより、多くの書物が出版される。こうした時代のなかに、民権家たちも熱心に書物を買求め、知識や教養を個々に深めていくという動きが見られる。彼らの蔵書は「文明」を概説する啓蒙書、天賦人權思想や立憲政体を論じた政治・法律の書、政治小説はもちろんのこと、漢籍や漢詩集、絵草紙など多種多様である。村の教養層であり、読書をたしなみとしてきた民権家たちは世に溢れ出た書物に、好奇心を掻き立てられたのであろうと考えられる。また、それらから得られた知識や教養が彼らの運動や活動に活かされたものであると考えられる。広域なあらゆるところから書物を集め読み知識を深めていった。

図表6-3 多摩地域における民権家の主な蔵書

『仏国民約論覆義』	ルソー著、原田潜訳述、春陽堂蔵版。 ルソーの「社会契約論」の翻訳本。
『国体新論』	加藤弘之著、谷山楼蔵梓。天賦人權論を説いた一冊。しかし加藤は民権議院の設立には時期尚早として反対し、細野喜代四郎の書き込みにもそのことが書かれている。
『西洋事情』	福沢諭吉編著、慶應義塾出版局発行。福澤自身の西洋体験と洋書の知識を駆使して、文物、制度、歴史、軍事、財政などについて紹介している。初編は印刷を重ね、15万部を超えるベストセラーとなった。
『学問のススメ』	福沢諭吉著。「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ人ノ下ニ人ヲ造ラズト云ヘリ」ではじめる啓蒙的学問論の書である。実学と個人の独立の大切さを説いたもので、発行部数は10万部に上がったとされる。
『東洋之佳人』	東海散士著、原田庄左衛門出版。著者の「東海散士」は号で、本名は柴四朗である。会津藩士の家に生まれ戊辰戦争の際には、捕虜になっている。アメリカに留学経験を持ち、留学後には政治小説に手をかけて、また中央政界でも活躍し、本書には羽衣伝説に着想を得た小説である。
『通俗無上政法論』	板垣退助立案、植木枝盛記述、絵入自由出版。「万国公法」があるにも関わらず、欧米がアジア諸国を脅かしている現実に対し、「万国共議政府」を設けて「宇内無上憲法」を立てることで、「宇内の乱暴」を正し、「世界の治平」に至ろうと提案している。
『孟子』	中国戦国時代の哲学者、孟子が孔子の道を受け継ぎ仁義を説いたり、諸侯や弟子たちとの問答を集めたもの。多くの書き込みが施され熱心に勉強をした様子が伺える。
『明治太平記』	二書房発行、桜齋主人編集、鮮齋永濯画、初編二編各二冊。戊辰戦争についての絵草紙である。戊辰戦争についてのこうした読み物は、自らか目撃者だた当時の人々にとって、関心のあるものであったと思われる。
『西南太平記』	万笈閣発行、沼尻糸圭一郎。初編二冊。西南戦争について書かれた絵草紙である。
『古今実録 佐倉義民伝』	赤松市太郎反刻出版人、栄泉堂。将軍家に直訴することで、領主からの重税にあえぐ農民を救ったとされる義民、佐倉宗五郎の物語。養子ともども処刑された宗五郎が、宗吾大明神として神に祭られるまでを描かれている。
『青木家の銅版画』	明治10年代後半、南多摩郡相原村（現町田市）の民権家、青木正太郎の屋敷の銅版画。母屋と左右の鼓一つずつは、現在もそのまま残されている。右側の奥には青木勘次郎（正太郎の父）が校主となって設立した「養英館」があり、校庭にはその旗が翻っている。
『錦絵「川上の新作当世穴さがし おっぺけペー歌」』	1889年「自由童子」を名乗る川上音次郎が歌って人気を博した歌。「権利幸福嫌いな人に 自由業をば歌したい オッペケペオッペケペッポーペッポーポー」との歌い出しは独特の節回しで、「権利」や「自由」の詩を人々の脳裏に焼き付けた。
『錦絵「一寸みなんしことしの新ぱん」』	慶応3（1867）年3月 幕末の物価高騰を示す錦絵。狂斎（河鍋暁斎）画。顔に米・薪・呉服などの生活必需品名を書かれた人間が、富士山に登る様子を、物価の高騰と重ね合わせている。
『異国艦渡来細記』	ペリー来航は、地域リーダーにとっても衝撃的な出来事であった。そのため、異国編がやって来たときの様子やそれに対する幕府の対応などが、挿絵入りで記されている。

『時雨日記帳』	安政4（1837）年 上叟師村名主・佐藤正憲が書き残した日記。右側中央下段には、桑をはじめ、米・小麦などの稲場が書かれている。前年には桑の値段が高騰しており、物価が大きく変動している様子がわかる。
『図解五十余箇条』	昇鳥一景画。東京府で公布・施行された条例の内1873年1月に追加された第57条までについて、見開きごとに1～3条分をまとめてある。文字を読めない人々に条例の中身、つまり”してはいけないこと”を周知するために使用した。
『佐藤壮作の責善会を詠んだ漢詩』	自由党会員の佐藤壮作が責善会について詠んだ漢詩で、朱書は大沼枕山の添削によるものである。奇譚なく是非を討議し、「品行方正」が目指されていたことがわかる。
『学芸講談会規則』	学芸について演説・討論をして、各自の知識を交換し気力を奮い起こすことを目的としている。 集会条例を意識してか、「日本現今ノ政事法律ニ関スル事情」は扱わないこととしている。毎月5日（5・15・25日）に開かれ、演説者には事前の議目提出が義務付けられていた。

（資料）町田市自由民権資料館展示資料より作成

民権家の人々は多くの知識を人々に与え、考えさせる力をつけようとしていた。そのために多くの知識層は学校を開き集めた本を使い、多くの人々に勉学をつけさせ、武力だけではない民権運動を実現しようとしていた。その中で、青木正太郎や坂本龍之輔は傑出した存在であったという。

青木正太郎は南多摩郡相原村の出身。28歳の若さで神奈川県会議員に当選し、壮士と呼ばれる、腕力でもって政治的問題に影響を与え解決しようとした人々と対決した自由民権運動家であった。彼は民撰議院設立建白書に署名するなど精力的に活躍した青木は、自由党内で高まる壮士らの横暴を非難する。そのため、壮士をバックにつけた政敵に議席を奪われる、自由党から除名される、など壮士からの激しい抵抗に遭う。しかし、1898年の衆議院臨時選挙では政敵を破り、国政に進出する。この選挙の最中に弟に充てた手紙には、壮士を利用することや壮士の請求を拒むよう綴られ、彼が腕力を政治の世界に持ち込むことを一貫して拒絶し続けた強い姿や知識を得る場所を建てるべく私立学校である「養英館」や「武相銀行」の設立に関わり、地域社会の発展や繁栄に努めていた。政治的な運動が暴力に飲み込まれていく時代を迎えつつある中、彼の運動の功績は非常に高く評価されるだろう。

坂本龍之輔も江戸時代から続いている八王子千人同心の世話頭格の家で、五俵二人扶持であったと言われている。神奈川県西多摩郡西秋留村に生まれ神奈川師範学校に学び、西多摩郡古里村の習文尋常小学校（現・西多摩町古里小学校）、神奈川県下町田村の日新尋常小学校（現・町田市立町田第一小学校）、大和市の渋谷高等尋常小学校（現・大和市立渋谷小学校）、町田村の開曠（かいもう）高等尋常小学校（現・町田市立南第一小学校）の校長を歴任。添田唾蟬坊の長男添田知道を教えるなど、1921年には健康上の理由で職を辞すまで、

万年尋常小学校の校長を務めた。この教育実践は、単に貧困家庭の子どもたちに教育を与えるだけに留まらず、学校内に、浴室、理容室、雨天体操場、診療治療室、保育誘導室などを設け、「特別手工科」と名付けた子どもに「稼ぎ」をさせながら同時に「働くこと」を学ばせる教育（男の子は楽焼の玩具、女の子はレース編みなど）、郊外学習(弁当を支給して、遠足や運動会までも兼ねたもの)、花園・動物飼育・標本を豊富にそろえて実物教授、あるいは直感教授の導入、「風紀団」と称して教職員による校外指導や家庭訪問を重視するなどの当時の教育の水準から見ても、先進的な実践を行った。また、この学校とは別に、弟妹の子守のために学校に来られない子どもたちのための子守学校、既に年長で学校に行けなかった青年たちのための特殊夜間部などの活動も行った。その実践教育がかつての教え子であった添田知道の『小説 教育者』、坂本の万年尋常晩年病床についていた坂本の元を訪ね、聞き書きをもとに小説として再構成し大正、昭和期に教育の範として知られた。

第7節 考察

これまで各メディアから見た自由民権運動と多摩地域のつながりを見てきていたが、この動きを表舞台で活躍していた知識を持たない農民層、いわゆる壮士であったがそれらを支援するのが、文学者やジャーナリストなどの行動派知識層たちであったと私は考える。彼らの先を読む力が富んでいたからこそ、多くの人々が情報の大切さを理解していたのだと考える。また、三多摩壮士を中心とした、行動派壮士の武力だけで解決するのではなく、「自由という名の権利」という抽象的あるものを獲得するために、そもそも「自分達にとっての自由」を見いだすための啓蒙活動を行い、文字すら読めなかった農民層の学力を向上させた。それらは、知識層にある人々のたぐいまれなる努力の結果であったと私は考える。史実では自由民権運動は衰退していったと記述するものが多いが、私はそのように思う事はない。なぜなら、このように自由民権運動とメディアの関係性を調べるにつれ、本論だけでは語る事が出来ないほど熱意や意思、考察などのものを現代にまで受け継がれているからだ。その想いは「媒体」として形をなし、個々人の考える事をそのまま形にしている。

そして、自分以外の他者に発信する「媒体」としての役割の大切さを伝え、それら「媒体」が形を時代に合わせ順応して我々にとっての必要不可欠な存在として現代に息づいている。例え、「媒体」自体の形は変わったとしても、自由のために活動した人々の想いは今も私たちの生活の中に存在している。その事を考えると、衰退しているのではなく現代にまで彼らの想いは受け継がれていると考えられる。その結果、私たちはこれから未来を自分たちで決めていく事が出来る。だからこそ、情報社会である現代に生きる私たちはその想いを持ってこれから未来を決めていく事が、過去の人々から課せられた本質的義務であると私は考える。

参考文献

- 安在邦男『自由民権運動への招待』吉田書店、2012年。
- 朝日新聞東京本社社会部『多摩の百年 下 ―絹の道―』朝日新聞社、1976年。
- 「五日市憲法草案の碑」記念編集委員会『「五日市憲法草案の碑」建碑誌』五日市町立五日市町郷土館、1980年。
- 色川大吉『明治精神史（上）』岩波現代文庫、2008年。
- 色川大吉『明治精神史（下）』岩波現代文庫、2008年。
- 色川大吉『流転の民権家』大和書房、1980年。
- 岩波書店『日本史年表 第4版』、2001年。
- 梅田定宏『三多摩民権運動の舞台裏』同文館、1993年。
- 大畑哲『神奈川の自由民権運動』新神奈川社、1981年。
- 大阪事件研究会（松尾章一）『大阪事件の研究』柏書房、1982年。
- 小島昌孝『武術・天然理心流 上 新撰組の源流を訪ねて』小島資料館、1978年。
- 佐藤文明『未完の「多摩共和国」新撰組と民権の郷』凱風社、2005年。
- 佐藤孝太郎『三多摩の壮士』武蔵書房、1973年。
- 三多摩文化研究会『多摩文化 第二二号 鈴木龍二記念号』1971年。
- 高橋康雄『メディアの曙』日本経済新聞社、1994年。
- 竹盛天雄『明治文学アルバム 新潮日本文学アルバム別巻』新潮社、1986年。
- 多摩市教育委員会生涯学習振興課文化財係『新撰組の人々と旧富澤家』財団法人多摩市文化振興財団学芸課、2003年。
- 伝田功『豪農』教育社、1978年。
- 東京都教育庁地域教育支援部管理課『東京都の民俗芸能 -東京都民俗芸能調査報告書-』2012年。
- 内藤湖南『日本文化史研究（上）』講談社学術文庫、1976年刊行永井秀夫 『日本の歴史 25 自由民権』小学館、1976年。
- 日本近代史研究会『画報日本近代の歴史 4 ひろがる自由民権運動』三省堂、1979年刊行
- 服部幸雄『歌舞伎の歴史』岩波書店、2008年。
- パルテノン多摩『地域文化の源流』、2001年
- 藤野敦『歴史文化ライブラリー135 東京都の誕生』吉川弘文館、2002年。
- 古島敏郎編『体系日本史叢書 12 産業史Ⅲ』山川出版社、1966年。
- 松尾正人編著『多摩の近世・近代史』中央大学出版部、2012年。
- 三波春夫『歌藝の天地：歌謡曲の源流を辿る』PHP文庫、2001年。
- 渡辺奨「石坂昌孝の生涯」『多摩文化 第9号』、1966年。
- 渡辺奨、鶴巻孝雄『石坂昌孝とその時代』町田ジャーナル社、1997年。
- 渡辺欽城『三多摩政戦資料』有峰書店、1977年。

謝辞

本論文を作成するにあたり、担当教員の中庭光彦先生・奥山雅之先生・木村知義先生には大変お世話になり深く感謝いたします。また、インターゼミ担当教員の先生方、大学院生の方々には数多くの助言を頂きました事に感謝いたします。

そして最後に、寺島実郎学長には貴重なご意見を数多く頂きました。ここに心より感謝の意を表します。
